僧侶は勇者を恫喝し、魔王を従える

Aura

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僧侶は勇者を恫喝し、魔王を従える

【Ｎコード】
Ｎ０６９４Ｙ

【作者名】
Ａｕｒａ

【あらすじ】
「お前は神の啓示によって魔王討伐に選ばれた僧侶だ！勇者の俺ににについてこい！」「ウジ虫が粋がるなよ。死にてぇのか？……」魔王討伐のために勇者は神様の示した仲間を集めるべく旅をしていた。
そこで出会った僧侶は口が悪く、ガサツで、自分勝手な最強僧侶？
「もっと！もっとお願いします！」
魔王討伐のための勇者パーティーの旅は続く？

文字の量やスペースの取り方など、色々なアドバイスを頂けると嬉しいです。

なおこの作品の更新は完全不定期で行いたいと考えております。
よろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

この作品で、パソコンでの読みやすい書き方とかを色々試してみたいと考えています。
そのため文字の量やスペースの取り方など、色々なアドバイスを頂けると嬉しいです。

なおこの作品の更新は完全不定期で行いたいと考えております。
よろしくお願いします。

プロローグ

王都スプリジア。その名の通り王が住む城の城下町として栄え、この国の根幹をなす都市である。
そんな大都市に、もっとも多く存在する教会が聖フィオ教会だ。
フィオ教はこの世界で最もポピュラーな宗教で、半分以上の人はこのフィオ教を信仰している。
そんな、数多く存在する聖フィオ教会の一つに少女はいた。
片膝をついて、赤子を抱く聖母ホーライトの像に祈りをささげている。

「ああ、どうか一日でも早く、この世界から魔物の恐怖が消えますように」

そう祈るのが少女の日課だ。
今日も同じように、聖母ホーライトの像に向かって祈りをささげていた。

「最近では、西の森で魔物が増えていると聞きます。ホーライト様、どうか弱き私たちに神の御加護を」

その日の祈りを終え、教会を出ようと立ち上がった時、変化は起きた。
辺り一帯が白く輝き、景色が見えなくなる。
少女は一瞬のうちに真っ白な空間に閉じ込められた。

「な…なにが……」

その光景に驚きあわてる。

しかしどこか安心感のある空間だと少女は感じた。
まるで母親の腕の中に抱かれるような。

（マリア――――マリア――――）

突然頭の中に響き渡る声。
それは紛れもなく少女自身の名前を呼んでいた。

（聞こえますかマリア――――）

「は…はい。聞こえます」

少女マリアは、無意識のうちにその声に返事をしていた。

（あなたに神からの啓示を与えます）

「あ、あなたは」

（私は、あなた達がホーライトと呼ぶ存在。あなたが毎日、欠かさず祈りをささげたことで、私とあなたの間に絆ができ、それによって神の啓示を告げることができるようになりました。啓示を聞き、どのように行動するかはあなた次第です。あなたの心のままに行動しなさい）

「はい」

マリアは聖母ホーライトの言葉が嘘だとは思えなかった。
そして聖母ホーライトの言葉を――――神の啓示を受け入れた。

（間もなくあなたのいる教会に来る少年がいます。名はエース。神

の加護を受け、光の力を宿した、勇者となるべき存在の少年です。
あなたは、この啓示をその少年に伝えるのです。そうすれば、あなたの行動はきっと良い世界に導かれるでしょう）

「はいホーライト様」

マリアは一回だけうなずいた。
すると光に満たされていた空間はスッと無くなり、元の教会に戻っていた。
マリアは教会の扉を見る。
今から来る少年に聖母ホーライトから授かった神の啓示を伝えるために。

そしてこの瞬間から、勇者となる少年の運命は、大きく回り出した。

プロローグ（後書き）

もしよろしければご意見、ご感想お願いします。

王は勇者に託し、剣士と旅立つ

「必ずや姫様を魔王の手から救出して見せます！」
「たのんだぞ。もはやそなただけが頼みだ」
「は！」

エースは今、王の前にいた。
偶然立ち寄った教会で、マリアと名乗る少女から神の啓示を受けたエースは、勇者として魔王を倒すことを決めた。
両親を魔王によって殺されたエースは、魔王を倒すべく国王軍の入団試験に来た所で、その話を断る必要は皆無だった。

その後マリアとともに王城へ行き、その事を王に告げた。
国王お抱えの星読みの魔女によってその事は預言されており、エースは何事も無く勇者として迎えられ、マリアもまた神の啓示の巫女として王城へ迎え入れられた。

それが今から二か月前の話しだ。
そしてエースは、一昨日まで勇者として修行に励んでいた。
しかし、修行の祠と呼ばれる場所で修業を積んでいたエースに、驚くべき情報が王国兵からもたらされた。
それは王女が魔王の手先によってさらわれたと言う物だ。
その話を聞いたエースは急遽（きゅうきょ）王都へ戻り、王と謁見した。

そして今に至る。

「星読みの魔女によれば、エリスは魔王城に連れて行かれたそうだ。しばらくの間は、命に別状は無いそうだが、魔物のはびこる魔王城に一人でいると思うと心配でたまらん」

エリスとは女王エリシールのことだ。
王の顔には悲痛な面持ちが浮かんでいる。目元にはくっきりと隈が浮かび、頬も痩せて憔悴しきった様子である。いつも、王の横でやさしい頬笑みを浮かべていた妃の席は空席だ。
妃は王女をさらわれたショックで寝込んでしまっていた。

「必ずや王女を助け出して見せます！」

エースはもう一度、王を励ますように宣言すると、謁見の間を出た。
謁見の間を出ると、すぐに横から声が掛けられる。

「あんな見栄きっちゃって大丈夫なの？私魔王とかよく分かんないけど凄く強いんでしょ？」
「強い強くないは関係無いんだ。これは俺たちが必ずやらなきゃいけない使命なんだ」

今エースに声を掛けてきたのは、剣士のシルビアだ。
魔王を討伐するために旅をする勇者のお伴として旅について行くことになっている。
シルビアは女性剣士だが、その腕は本物で、勇者のお伴を決めるための、騎士団の闘技大会で見事優勝を果たしている。それも無傷でだ。
修行を積んだ今のエースならそれぐらいは出来るだろうが、それは光の魔法を加えた戦いでの話で、純粋な剣技だけならシルビアが上回っているだろう。

「でもとりあえず仲間集めは必要よね。星読みの魔女様も仲間を集めろって言ってたんでしょ？」
「ああ。勇者と剣士、それに拳闘士と弓使い。そして僧侶の五人を

集めろって言ってたな。今は勇者の俺と剣士のシルビアがいるから後は三人か」
「魔女様はなんて？」
「東に向かえって言われてる。そこに僧侶がいるらしい」
「僧侶って言えば、魔法使って傷の手当てとかしてくれる人だよね。やっぱ早い時期からいてくれた方がオフェンスとしては助かるしね」
「まあそうゆうことだから、明日の朝出発するぞ。準備しといてくれ」
「了解、了解」

そう言うと、シルビアは廊下を歩いていった。
それを見送ったエースは自分の支度のために王城に貸し与えられた自室に戻る。
明日からの旅が、人生初の経験と言うわけでは無いので、旅仕度はなれたものだ。
そもそも、自分が生まれ育った村から王都に来るまでも三カ月近い旅をしてきた。
その間、魔物に襲われたことや、山賊に絡まれたことも何度かあったが、それも無事に凌いで今ここにいるのだ。
旅に関して心配しているのは、シルビアのことだ。
シルビアは王都で生まれ王都で育った、生粋の都会派少女だ。
それが森の中の野宿や、洞窟などの探索を出来るかどうかエースは心配していた。
一応訓練は積んでいるらしいが、訓練と実際は別物だ。
シルビアはどうも、その事を分かってないような感じがした。
もう一度しっかりと注意しておかないと、と思いながらエースは自分の準備をしていった。

一方、当のシルビアは城下町に来ていた。
明日からの旅に持っていくものをそろえるのと、ちょっとした用事

のためだ。

「ようシルビアちゃん。今日は寄ってかないのかい？」
「ごめんね～、明日から王都を離れることになっちゃって、しばらくはこれないと思うの」
「そうかい、それは残念だね～シルビアちゃんがいるだけで店が華やかになるのに」
「また上手いこと言っちゃって～。まあ友達にこの店紹介しとくよ」
「そりゃありがたい。気おつけて行ってくるんだよ」
「任せな～」

今のは、行きつけの喫茶店のマスターだ。

「ようシルビー。良い果物が入ったんだが買ってっか？」
「ごめんね～明日から旅にでるから日持ちのするもの買うんだ～」
「そりゃ残念だ。ならこれは餞別だ持ってきな！」

そう言うと果物やの店主はリンゴを投げ渡してきた。
それを礼を言って受け取り、かじりながら町を歩く。
シルビアが街を歩くだけで、いろいろな人から声を掛けられる。
それだけシルビアが街に浸透しているのを意味していた。
掛けられた声に一人一人丁寧に返して行き、目的の店にたどり着いた。

「コリンいる～？」

店に入って声を掛けるが、反応は無い。
だが、シルビアは遠慮なく店の奥に入って行った。
奥の部屋で寝ていることを知っているからだ。

「コリン～」

案の定、店の奥にあるベッドに目標の人物は寝ていた。

「また店開けっぱなしで寝てる。起きて、お姉ちゃんが来たよ」

ゆさゆさとゆするとコリンは目を覚ました。

そして瞼をこすりながら姉を見つけると「おはよ～」と符抜けた声で返事をする。

それを見て「もう昼だよ」と言いながら、締められたカーテンを開けた。

光の眩しさにコリンは目を瞬かせた。そして徐々にはっきりと意識を覚醒させてゆく。

「お姉ちゃんおはよ～。こんな時間にどうしたの？」

姉が騎士団に入っていることを知っているコリンは、普段なら姉がこの時間は訓練の時間なのも知っている。そのため出てきた質問だった。

「明日から少し旅に出ることになったのよ。それで今日はその準備のためのお休み」

「そうなんだ～、また魔物退治？」

「魔物って言ったら魔物なんだけど、相手は魔王よ。知らない？王女様が魔王に誘拐されたの」

「知ってる。じゃあ噂の勇者様と一緒に行くの？」

「そうよ。選抜大会で優勝したからね」

「凄い！流石お姉ちゃんだ！」

「んふふ。ありがと」

腰に抱きついてきたコリンの頭をシルビアはやさしく撫でる。
シルビアとコリンはもともと孤児院で育った。
大きくなってきて、一人でも稼げるようになった時、二人は孤児院をでて、才能のあったシルビアは騎士団に、コリンは雑貨店を始めた。
大きくなったと言ってもシルビアはまだ十六歳で、コリンに至ってはまだ十二歳だ。
農家としてなら十分な働き手になることはあっても、商売をするうえではまだ幼い。
そこでシルビアは、定期的にコリンの店を見に来ていた。

「それでね、魔王を倒す旅だから、今回の旅はかなり永くなりそうなの。下手すると一年二年帰ってこれないかもしれない。死ぬ気は無いから絶対に戻ってくるけどね」

そこで安心させるように、コリンに小さくウインクする。

「だからその間、この店を一人で切り盛りしなきゃいけない。分かるよね？」
「うん」
「出来る？」
「大丈夫だよ。私もだてに一年もこのお店やってないもん」

コリンは自分の胸をポンと叩く。

「よく言った。流石私の妹だ」
「えへへ～」
「じゃあ、私はまだ準備があるから行くね」
「うん。お姉ちゃん気をつけてね」
「まっかせなさ～い。街とかに寄ったら手紙書くから」

「うん。楽しみに待ってるよ。行ってらっしゃい」
「行ってきます」

そう言ってシルビアは店を出た。
昔は帰る場所が孤児院だったが、今はコリンの待っているこの店がある。
必ず帰ってくると胸に誓って、シルビアは王城へ戻って行った。

翌朝。
王城の門の前に二人は立っていた。

「じゃあ行くか」
「おっけ～」

エースは肩に掛けるタイプの鞄と、腰に片手剣。背中に盾をしょっている。
軽そうに持っているが、剣も盾も三キロ以上あり、一般人が持って歩けば十分とせずに疲れ果ててしまう代物だ。
このあたり、勇者のたくましさが表れている。
一方シルビアも同じような鞄を肩から下げていた。
だが、腰に片手剣は無く、背中に大きな両手剣を背負っていた。
これがシルビアの愛用の武器だ。
少女から放たれるとは思えない重い一撃が、これまで多くの魔物や盗賊を撃退してきた。

二人は王都を出て、僧侶がいると言われている東へ向かった。

勇者は剣士と旅をつづけ、メイドに会う。１（前書き）

まだ僧侶出てきません。次の更新にはやっと出てきます！
区切りが上手くつかなかったのでこれはちょっと短めになってしまいました。

勇者は剣士と旅をつづけ、メイドに会う。1

勇者の旅は順調そのものだった。
東へ向かう間、いくつもの村により、そこであった人々から話を聞く。
そして魔物に苦しんでいると聞けば助け、そのお礼にと食料や武器を与えられた。
勇者はその好意を拒否すること無く受け入れた。

しかしシルビアは、勇者への崇拝にも似た期待を寄せている村人に少し戸惑いを感じていた。
そしてシルビアは、勇者エースがそれをどう思っているのか、今夜聞こうと思っていた。

「ねえエース」
「なんだ？」

今日は前日に村を出たばかりで、次の村までは三日ほど掛かる道沿いの原っぱで野宿だ。
今ならエースの真意を聞けると思い、シルビアは思い切ってエースに問いかけた。

「最近、村人があんたに寄せる期待が大きすぎると思うんだけど、あんたはどう感じてる？」

寄る村々で人助けしていることもあり、すでにこの辺では勇者が来ていることが明白になっている。どこかの村に立ち寄れば村総出で歓迎されるほどだ。

「別に問題無いだろ。実際俺たちはあの人たちを助けてるし、感謝されるのは当然のことじゃないのか？」
「最初は確かにそんな感じだったけど、最近はそうでも無いじゃん。村に補給に寄っただけでなんかすっごい歓迎されて、食糧とかもただで分けてもらっちゃってるし」

シルビアの懸念はそこに会った。
何かの感謝として食料などを貰う分には特に問題ないと思うのだが、最近では無償で貰ってしまっている。それでは恩を返しているとは言えない。

「考えすぎだろ。俺たちは魔王を討伐するって重大な使命を背負ってるんだ。それぐらいされても罰は当たらないよ」
「う～ん、そうなのかな～」

そのあたりシルビアは良く分かっていない。
孤児院で育ち、何かを貰うには常に対価が必要だった昔に比べると、今は楽すぎる。
その差が、シルビアに違和感を与えていた。
そしてこの勇者の態度にも。

「そうだって。じゃあ俺はそろそろ寝るから、交代の時間になったら起こしてくれ」

そう言ってエースは布団を頭からかぶる。
今日は野営と言うこともあって、魔物に襲われないように交代で警備する必要があった。

「了解」

シルビアは番をしながら最近のエースの態度を考えるのだった。
その後もエースたちは魔物を討伐しながら東を目指す。
そしてエースはその力で困っている人々を助け続け、次々と魔物を退治していった。
それに比例して、エースへの歓迎の度合いも増していた。

一つ前の村にたどり着いたときなどは、もはや祭のような状態だ。
シルビアが収穫祭でもやっているのかと聞いた時に、勇者が来るかもしれないから準備していたと聞いた時は心底驚いた。
そしてエースはそれが当然とばかりにその歓迎を受け、飲み食いして村を後にした。
その時のエースの反応をシルビアは唖然として見ていた。
俺は勇者だと名乗り、村の女性を侍らせ、大いに祭を楽しんでいたのだ。
勇者と言えど、エースはまだ思春期真っ盛りの男子だ。
女性に鼻の下を伸ばすのはしょうがないと思っていたが、流石に酷過ぎる。

そう考えたシルビアは、一度エースに少しは自重するように注意をしたが、全く聞く耳を持ってくれなかった。
その事もシルビアを不安にさせた原因の一つだ。
エースは実力がありすぎる。しかし、精神はそれに対応した形では育っていない。
そして間違いを起こした時、それを止めれる人物がいない。
何とかしなければ……
コリーの姉として育ったシルビアの姉心が燃え上がっていた。

勇者は剣士と旅をつづけ、メイドに会う。2

そしてさらに二週間ほど旅を続け、一つの村にたどり着いた。
すでに王都をでてから一カ月が過ぎようとしている。
収穫が名声しかない旅に、二人はそろそろ疑問を持ち始めていた。
そんな時にたどり着いたのがこの村だ。

だが、この村は他の村とは大きく違っていた。

「廃村なのか？」

エースの疑問ももっともだ。
閑散としていた。
今までの歓迎が夢だったかと思えるぐらいに人がいない。
だが、家自体は綺麗に整備されているので無人と言うわけではないだろう。

「とりあえず村人を探そう」
「そうね」

二人はまず村の中心まで行くことにした。
小さい村なのだろう。中心にはすぐについた。
そこで一人の老婆を発見する。村の中心は広場になっており、そこに井戸が設置されている。おそらく、そこに水を汲みに来たのだろう。

だが、腰の曲がった老婆が井戸から水を組めるとは思えない。
二人は駆け寄り、手伝おうとしたが、そこで見た光景に二人の足は止まった。

老婆がやすやすと井戸から水をくみ上げているのだ。それも、二人でも苦労しそうなほど大きな水桶でだ。

「なあ……どうなってるんだ、あれ？」

「私に聞かないでよ」

「とりあえず行ってみるか」

二人が近づくと、老婆も二人に気づいたのかお辞儀をする。
それに返すようにお辞儀をして、老婆の元までたどり着いた。

「おや、こんな辺境の村に冒険者さんですかな？」

老婆は穏やかにほほ笑みながら二人を迎える。
その様子からこの村には勇者の情報が来ていないのが推測できた。

「いや、俺らは魔王を倒すために旅をしているんだ」

「おやまあ、それはお疲れ様だね～」

魔王と聞いて、特に驚かない老婆に逆に二人が驚かされた。
今までの村人はみな、魔王と言う言葉を聞いただけで怯える。

それは当然のことだろう。
小さな村ではちょっとした魔物が出ても対処できず、酷い被害が出るものだ。
それが魔王となれば、どれだけの被害になるか分かったものではない。
と言うより、確実に村ごと滅ぼされる。
それを知っているからこその怯えだが、老婆にはその様子は見られない。

この村にはよほど強い人が常駐でもしてるのだろうか。
シルビアはその事が気になり、少し聞いてみることにした。

「この村はとっても平和に見えますけど、魔物の被害とかは無いんですか？」
「魔物の被害なんてとんとないね～。これもあの人が来てくれたおかげじゃ」

やはり誰か強者が常駐しているようだ。
だが、なぜこの村なのだろうか。特にここにいる理由は無いと思うが……出身がここなのだろうか？

「その人が魔物の退治を？」
「うんや、あの人が来てから魔物自体がこの村を襲わんくなった。まったく何をやったか知らんが、ありがたいかぎりじゃ」
「討伐されたとかじゃないのか？」
「あの人はめったに村から出んよ。今日もそこの教会におるはずじゃ。気になるなら行ってみるとええ」

老婆がさしたのは村のはずれにある小さなフィオ教の教会だ。
そこにその人物はいるのだろう。

「あの人のおかげでこの井戸もえらく使いやすくしてもろて、ほんま感謝しとる」
「そう言えばこの井戸、やけに軽く持ち上げてましたね？」
「なんでも、魔術つこうて簡単に持ち上げられるようにしてくれたらしいて」
「そうだったんですか」

二人はその後も老婆のとどまるところを知らず、あの人の凄いこと

を語り続けてくれた。
曰く、あの人は定期的に動物を狩ってきてくれる。
曰く、魔術で火災を消してくれた。
曰く、魔術で病気を治してくれて、しかも治療費をとらない。
などなどだ。
どれも魔法使いなら簡単に出来そうなことだが、井戸の魔術が非常に長い間効いていることと言い、かなりレベルの高い魔法使いなのだろう。

やっと老婆の話から解放された二人は、老婆の言っていた教会にやってきた。

「ここにその魔術師がいるのか」
「そうみたいね。話しを聞く限りじゃかなりいい人じゃない」
「そうだな。魔王の討伐なら快くついてきてくれるだろ。なんてったって勇者と一緒に旅ができるんだからな。それだけでかなりのステータスになるはずだ」
「どうかな～、聞く限りだとあんまりそうゆうの興味無さそうだけど」

聞いた話は全て、無償でやっていることのようだ。その代り、村人から少しばかり食料を貰ったりするらしいが、過剰な報酬は一切受け取らないとのことだ。

「関係無いって。英雄の名声をそこらへんの宝と一緒するなよ」

エースは笑うが、シルビアはその言葉にどんよりする。
シルビアの注意が全く効いていない。

「とりあえずここにいても始まらないし、中に入ってみようぜ」

「それもそうね」

二人は教会の扉を開き、中に入った。

勇者は剣士と旅をつづけ、メイドに会う。３（前書き）

物語の主要人物の一人メイド登場です。

勇者は剣士と旅をつづけ、メイドに会う。3

教会の中は王都にあるものとさほど変わらない無いそうだ。
小さい分、席数は少ないが、正面に聖母ホーライトの像が飾られ、
その前に聖職者が立つ台が設置されている。
横には小さなオルガンがあり、奥には扉がある。その奥がおそらく
聖職者用の居住区になっているのだろう。

「誰かいるか？」

エースの声が教会に反響する。

「すみませーん」

シルビアも声を上げるが、それも反響するばかりで人が出てくる気
配は無い。

「どうするかな」
「奥にいるかもしれないし、私ちょっと見てくる」
「わかった。俺はここで待ってるわ。誰か来るかもしれないし」
「了解～」

シルビアは、奥にある扉の前に来た。
ノックをする。
特に反応は無い。
もう一度。
それにも反応は無い。
「しつれいしま～す」

扉も前で突っ立っていてもしょうがないので、恐る恐る扉を開いた。
中は小さな応接室になっているようだ。
真ん中に簡単なソファーとテーブルが置かれている。
さらにその奥にも扉が会った。

静かすぎる教会に少し恐怖しながらも足を進める。
そして声が聞こえた。
声は奥の扉から聞こえる。
だが、その声はしゃべり声ではない。

（ん…あっ！……ん！んん！…あっ！）

女性の声だ。そしてその息遣いは荒い。
いや、荒いと言っても疲れて乱れているわけではない。

（ん…んんん！）

シルビアはその声を聞いた瞬間、扉の奥で何が行われているのか想像してしまった。
そして顔を真っ赤にする。
そして静かにまわれ右をした。
これ以上先に進む訳にはいかない。今行けば、確実に取り返しのつかない状態になる。
そう思って、シルビアはこっそりと部屋を後にしようとした。
しかしその時、入ってきた扉から来てはいけない人物が現れた。

「シルビア誰かいたムグッ！」

その顔が現れた瞬間、シルビアはすでに動いていた。

エースがしゃべりきる前に口を押さえ、全力で部屋から押し出す。
その際足音がひどく出てしまったが、気にしてる場合では無かった。

「なにすんだよ！」

外に出て、エースを開放すると、案の定文句を言ってきた。

「あの奥に人がいたのは間違いないわ」
「なら何で逃げたんだよ！さっさと行けばよかっただろ！」
「それができたら苦労しないわよ」

声を聞かなかったエースには理解できないことだろうと思いながら、
シルビアは教会を見る。
もう一度行くべきか、出直すべきか……

だがその考えは杞憂に終わる。

「どうかなさいましたか？」

教会から一人の女性が出てきた。
その姿に二人は目を奪われる。
黒髪は肩甲骨辺りまでふんわりとウェーブを描きながら伸びている。
瞳は赤く、その視線は真っすぐに二人を捉えていた。
そして最も特徴的なのが、教会から出てくるには異質すぎるその服装。

「メイド？」

青を基調にしたエプロンドレスは紛れも無くメイド服と呼ばれる、
その業界の人物しか切ることのないだろう服装だった。

「はい、メイドのサータニアンと申します、呼びにくいですのでサーニャとお呼びください。ところであなた達は見たところこの村の人達では無いようですが？」

サータニアンは丁寧に名乗り、二人に疑問を投げる。

「俺は勇者のエースだ」

「私はシルビア。剣士をやってるわ」

「勇者様と剣士様でしたか。それでこちらにどのような用件で？この村には特に何もありませんが」

サータニアンは二人の近くまで来ると、さらに疑問を投げる。

シルビアはその表情から自分たちが教会の中に入っていたことを知られていないと思い安堵した。

「私たちは預言者さまに言われて旅の仲間になる僧侶を探しているの。その僧侶は王都から真っ直ぐ東に向かうと会えるとお告げにあったのよ」

「そうゆうことでしたか。それならばその僧侶とは私の主のことかもしれません」

予想外の言葉に二人が驚く。

思わぬところから僧侶の情報が入ってきた。

「サーニャさんの主が僧侶なの？」

「回復系の魔法を使え、教会の聖職者を務めておりますので、一様はそのように部類されるかと」

「なら一度会ってみたい！」

「分かりました。では中に入ってお待ちください」

サーニャは二人を教会の中に促す。
それにしたがって、先ほど飛び出してきたばかりの教会の中に入って行った。

応接室に通され、お茶を出してもらい、そこでしばらく待つように言われた。
二人は大人しく、そこで待つことにした。
サーニャがお茶をエースの前に置き、シルビアの前にも同じように置いた。そしてサーニャは何故かシルビアの耳もとの口を寄せてくる。明らかに内緒話の時のスタイルだ。

「どうかした？」

シルビアはそれに対応して、小声でサーニャに話しかける

「勝手に部屋に入るのはあまり感心しませんよ？私も主も特に気にしてはいませんでしたから無視しましたが、あのまま居続けたら私も対処を考えていましたので」

その言葉を聞いたとたん、シルビアは顔からサーっと血の気が引くのが分かった。
バレている。しかも完璧に。
そしてその言葉から察するに、サーニャは別の場所からシルビアを見ていたのではなく、あのあえぎ声のする部屋にいて、自分のことに気づいてた。しかもその主もセットで……

「ご…ごごご……ごめんなさい！」
「うわ！なんだ！？」

突然大声を出したシルビアにエースは驚き、持っていたお茶を落としそうになる。

「ふふっ。さっき言った通り気にしていませんよ。では主を呼んでまいりますので少々お待ちください」

サーニャは二人に一礼すると、部屋を出て行った。

「何だったんだ？」

エースは出されたお茶を飲みながら、シルビアに大声のことを聞く。

「な…何でもないわ！気にしないで！」

「明らかになんかあるだろ、それ」

「なんでもないったらなんでもないの！」

シルビアは大きく顔を振りながら、ひたすら黙秘を主張した。

勇者は剣士と旅をつづけ、メイドに会う。３（後書き）

もしよろしければご意見、ご感想お願いします。

二人は僧侶と出会い、勇者は現実を知る。１（前書き）

やっと題名の僧侶登場です。
これで題名詐欺ともおさらばだ！

二人は僧侶と出会い、勇者は現実を知る。1

僧侶の男が入ってきたのは、サーニャが呼びに行ってしばらくしてからだ。
入ってきた僧侶の姿を見て、二人は呆然とする。
短い金髪の髪に眉を細くそりあげられている。目つきは鋭く、二人をにらみつけていた。見た目は二十代前半と言ったところか。カソックが恐ろしく似合わない。
呼びに行ったサーニャは、僧侶の後ろに控えている。

「なんだてめぇら」
「俺は勇者のエースだ！」
「私は剣士をやっていますシルビアと申します」

エースは僧侶の威圧に負けじと声を張り上げる。
対してシルビアは丁寧な言葉遣いで挨拶をした。
その対応が二人の明暗を分ける。

「こっちのガキは礼儀も弁(わきま)えてねぇのか。おい剣士、勇者の教育ってのはどうなってんだ？放任主義もほどがあるぞ」
「何を！俺は勇者だぞ。そっちこそ俺に対して失礼じゃないのか！？」
「すみません。何度も言ってはいるんですが、なまじ力があるせいか、自分が偉いのが当然と思ってしまったようで」
「マジかよ。こんなのが力持つとか神ってのは何考えてんのかね」

僧侶とシルビアはエースを無視して会話をつづける。
無視されたエースは余計に声を荒げていた。

「おい僧侶！俺は神に選ばれたんだぞ！お前聖職者なら啓示に従え！」
「さっきから猿がうるせぇんだよ。キーキー騒ぐな。ぶち殺すぞ」
僧侶の威圧は明らかに勇者の纏うオーラを委縮させていた。
シルビアはそのエースの様子に驚く。
そしてこの僧侶なら今の増長しきったエースを抑えてくれるのではないかと思えた。
なおも騒ぎ続ける勇者を無視して、二人の正面のソファーに座り、僧侶はシルビアに顔を戻す。サーニャは僧侶の後ろにそっと移動する。

「で、なんのようなんだ」
「はい、実は折り入って頼みがあります」

そこでシルビアは一旦言葉を切る。
孤児院出身のため、敬語は所々怪しい部分はあるが、それでも騎士団に努めている身だ。目上の人との会話の仕方はあらかた頭に入っている。
目上の人と会話をする場合、一気にまくしたてるように話すのではなく、一言一言に間を置き、相手の反応を待ってから話すのが常識だ。

「言ってみろ」

僧侶の反応から、この人物がかなり身分の高いくらいにいた人物だと言うことが分かった。
シルビアは言われたと通り、言葉を続けた。

「私達と共に魔王を倒すべく協力してもらいたいのです」

「魔王を倒す？」

僧侶は眉をしかめる。シルビアは最初、魔王が復活しているのを知らないんのではとも思ったが、それは無いと判断する。
ある程度の身分の物なら、出家していても情報は入ってくるはずだ。
まして、今の受け答えがすんなり出来る程度の身分の人間は貴族以上ぐらいしかいない。
なら魔王の情報ももちろんもっているはずだ。勇者と言う言葉にそれほど驚かなかったところからもそれは分かる。

「はい。私たちは現在、聖母ホーライト様の啓示により、勇者、剣士、拳闘師、弓使い、僧侶の仲間となる人達を探しています」
「それで？」
「聖母ホーライト様はその仲間たちを集め、魔王を倒すようにおっしゃいました。私たちはその啓示に倣い、今仲間を集めている最中なのです」
「なるほどな」

僧侶はシルビアの言葉に一様は納得する。
そこにシルビアは現状を付けくわえた。

「また、現在王女さまが魔物によって王城からさらわれ、魔王城に軟禁されております」
「王女が？」
「はい、どうやら魔王の命令で魔物が動いたと考えられております。城にいる預言者の預言によって、一年は命の保証はされておりますが、出来るだけ急ぐべきと考えております」

女王がさらわれたと聞いて、僧侶の態度が一変した。
何やら考え込んでいる様子だ。

そしてしばらく沈黙が続く。
流石のエースもこの重い空気に騒ぐのを止めていた。
先に口を開いたのは今まで後ろに控えていたサーニャだった。

「本当に魔王が命令したのでしょか？」
「魔物に命令出来るのは魔物を統べる王、すなわち魔王しかいないと我々は考えています。そうでなければ、今まで人間に会えば即殺そうとしてきた魔物たちが、王女様をさらうなどとはしないでしょうから」
「なるほど、確かにそうですね」

そしてサーニャまでも何かを考えるように黙ってしまう。
それと変わるように今度は僧侶が話しかけてきた。

「なんでいちいち仲間なんか集める。勇者がいれば軍を連れて魔王城に乗り込むことぐらい出来るだろ。王女奪還ともなれば兵士の士気も相当上がるはずだ」
「それが神の啓示だからです。勇者と共に旅をする仲間を五人。先ほど言ったメンバーを集めて魔王城に乗り込めと」
「なるほど。つまりそこのゴキブリが弱いから王国軍じゃ逆に潰されるって訳か」

そう言って僧侶は鼻で笑う。

「だから仲間を集めながら旅をして経験値を稼げと。神も面倒くさいこと選んだもんだな。俺なら強引にでも突撃させるね」

僧侶の神をも恐れない態度にシルビアは驚く。
サーニャは僧侶の後ろでクスクスと笑っていた。
そして先ほどから間接的に馬鹿にされつつけていた勇者がついにキ

レた。

僧侶との間にあるテーブルを蹴りあげ、勢いよく立ちあがる。
そして腰に付けている剣を抜き放ち、僧侶の眼前に向けた。

「さっきから黙って聞いていれば神様を馬鹿にして、俺を馬鹿にして、いい加減にしろよ！僧侶程度が、そんなこと言っていいと思っているのか！」
「いい加減にするのはてめぇのほうだ。ひとん家のテーブルぶっ壊しやがって。これだからクズだって言ってんだ！」

僧侶は剣を突き付けられても変わらず、勇者を罵倒し続ける。
それを聞いて、勇者の眉間には今にもはち切れそうなほど青筋が浮いていた。
怒るところはそこなのかと突っ込みたいのをグッとこらえ、シルビアはその光景を急いで止めようとする。
しかし、それはいつの間かシルビア後ろに移動していたサーニャによって腕を掴まれ止められた。
驚いたことに、日頃戦士として鍛えていたシルビアだが、その手はふりほどけないほど強く握られている。

「サーニャさん、止めないでください。あなたの主人が危ないんですよ！？」
「キール様なら問題ありません。見ていてください」

サーニャは落ち着いた声で言うと、小さく微笑んでシルビアの腕を離した。
勇者は今にもソファーに座ったままの僧侶に切りかかりそうな体勢だ。

「非常に不愉快だが、お前は神の啓示によって選ばれた僧侶なんだ。勇者の俺についてこい！」

剣を構えながら言うそれは、明らかに脅迫だ。

「ウジ虫が粋がるなよ！雑魚がいくら吠えても所詮雑魚なんだよ！連れて行きたきゃ力見せてみろ！」

シルビアは二人の緊迫した喧嘩を見ながら、エースの一人称が徐々に酷くなってるな～と思っていた。もはや現実逃避ぎみである。孤児院で辛い過去を経験してきたはずだが、それでもこれからの旅が思いやられる現状に、これまでにない危機を感じていた。

「良いだろう！俺が勇者の力を見せてやる！」

「水虫が！身の程を教えてやる！」

こうして勇者対僧侶という世にも奇妙な決闘は決まった。

二人は僧侶と出会い、勇者は現実を知る。２（前書き）

上位の魔物＝悪魔です。

二人は僧侶と出会い、勇者は現実を知る。2

教会から出た一行(いっこう)は森の中に入った。
前から僧侶、シルビアとサーニャ、最後がエースの順番だ。
シルビアはエースに最後尾をまかせたのを見て、ある程度実力を認めているのかとも思ったが、村人が近くに全く魔物が出ないと言っていたのを思い出して、関係ないと思いなおした。

「そう言えばまだ僧侶さまのお名前を聞いていませんでしたが、窺ってもよろしいですか？」
「ああ、そういやあそうだったな。俺はキールだ。好きに呼べ」
「ではキールさんと。それでキールさん、今私たちはどこに向かっているのでしょう？」
「この先に小さな伐採所がある。そこで勝負する。村の中で暴れられちゃ周りに迷惑がかかるからな」
「そういうことでしたか」

言っているうちに森が開けた。
円形に百メートル四方が綺麗に伐採され、広場ができている。
端に小さな小屋があるが、そこが物置だろう。

「ここだ。ここなら迷惑にはならん。馬鹿がどれだけ暴れても問題ない」

エースがまた噛みつくかと思ったが、エースはじっとキールをにらみ、殺意のこもった視線を投げ続けている。

「じゃあさっさと始めるか。塵芥がどこまで出来るか見てやる」
「あまり調子に乗るなよ僧侶。俺は今マジでキレてる。手加減は出

来ないぞ」
「ふん」

また鼻で笑った。
そしてシルビアとサーニャがある程度離れたのを見て、キールは手をクイクイっと動かし、来いと合図する。
それを見たエースは一気に飛び出し、剣を抜くと、キールめがけて振り下ろした。
一般人が対応できる速度では無い。
シルビアなら、今までの経験から避けることもかのうかもしれないが、初見であれば間違いなく切られていただろう速さだ。

キールはその場から一歩も動けなかった。シルビアは最初そう思った。そして一撃で勝負がついてしまうのかと落胆もした。
だが、結果は違っていた。
エースの振り下ろした剣は、僧侶の眼前で止まっている。
驚いたのは勇者の方だ。
間違いなく相手を殺すための全力の一撃だった。
それをいとも簡単に抑えられてしまった。しかも僧侶の得意とする魔術を一切使わずにだ。

僧侶はエースが剣を振り下ろす瞬間、右手だけで勇者の持っている剣を止めた。
しかもそれは、真剣白刃取りと呼ばれる技でだ。
シルビアもエースも噂には聞いたことがある技だ。
振り下ろされた剣の両側を両手で挟むことで受け止める。そう二人は聞いていたし、出来るとしてもそれが限界だと思っていた。
だが、今目の前で起こっていることはその限界を超えていた。
キールは親指と人差し指だけでエースの剣を受け止めていた。

タイミングがコンマ一でもずれれば確実に手を切断される危険すぎる技だ。
だがそれを成し遂げ、今エースの目の前に立っている。
シルビアはなぜキールがこんなことをできるのか、サーニャに尋ねようとした。
だが、サーニャの笑顔に聞くのを止めた。
それが当然と言う顔をしていたからだ。聞いても、おそらく期待している様な答えは返ってこないだろう。

「なんだこの緩い振り抜きは。そんなんで魔王を倒そうとしてたのか。ハッ、今のお前ならガキの頃の俺でも十分だな」
「この野郎！」

エースは強引に剣を引くと、再び構え直す。しかし、今度は両手では無く片手でだ。
そして開いた左手を胸の前に持ってくると、詠唱を始めた。
その詠を聞いて、シルビアが驚く。

「祖は偉大なる世界の母。
全てに光を与える大いなる存在。
その光を持って闇を払え！
閃光の蹂躙（ライトニング・エクスブロード）！」

それは間違いなく、エースが現在使える魔術で一番威力の高いものだ。
その一撃は、練習用にしていた藁人形を跡形も無く消滅させ、さらにその後ろにあった城の城壁を撃ち抜くほどの威力を持っている。
そこらへんの貴族の城ならいざしらず、王城の城壁を撃ち抜けるだけの威力を出せる魔術をシルビアは閃光の蹂躙（ライトニング・エクスブロード）しか知らない。
そしてそれは決して人に向けて撃つような代物ではない！

「エース！何考えてるの！それは人に向けて撃つようなものじゃないでしょ！」
「うるさい！こいつは俺の実力を見せろと言ったんだ！だから全力でいく！」
「良い心がけだカス。だが詠唱が長い！発動まで時間がかかり過ぎだ！
闇をもって世界を嗤え。暗闇の牢獄（ダーク・キューブ）」
光の矢を放とうとするエースの足元から、急に闇が湧きあがった。
それはあっというまにエースを飲み込み正方形の闇を創りだす。
「闇は光を通さない。その中でお前の魔術は無意味だ、クズ」
光は闇を照らすものだと思われている。しかし、深すぎる闇は光さえも弾く。
「馬鹿な！僧侶は回復系の魔法しかまともに使えないはずだぞ」
基本僧侶は神に仕えることで、その力を少しだけ借り、祝福という形で小さな奇跡を起こすのがやっとと言われている。
フィロ教の枢機卿クラスでやっと重病人を直せる力を出せるかどうかという物だ。
もちろん、彼らはそれ以外の魔術を全く使えないのが常識とされている。
「ならそいつらが愚図でノロマなだけだ。現に俺は使える」
キールが堂々と言い放った。
シルビアは今度ばかりはちゃんと理由を聞こうと、サーニャを見る。

するとサーニャもこちらを見ていて、クスっと笑った。

「あんなこと言ってますけど、キール様は特別です。普通はできません」

「じゃあなんで……？」

「キール様は悪魔と契約しておられますから」

「契約！？」

思いもよらない言葉に、シルビアの声が裏返った。

契約とは、人が召喚魔術などを駆使して魔界に存在する上位（あくま）の魔物と契約を結ぶことだ。そうすることによってその悪魔の使える力を使うことができるようになる。

しかし、この場合契約の対価として相当なものを要求されるとのことで、ほとんどの人間は悪魔を呼びだしただけで死んでしまうらしい。

そしてそのような危険な行為は、普通許されるものではない。

「そんなことしていいの？教会ってそうゆうの厳重に禁止してたはずじゃ……」

「ですから、この辺境の村でこっそりと生活しているんです」

「そういうことだったの。じゃあ神様の啓示は、この力を使えってことだったのね」

「そういうことだと思います」

二人で納得し、試合を見ていると、試合は大詰めに入っていた。

一方的にキールがエースをいたぶっているだけだが。

「どうした！これで終わりか！？早くそこからでないと炙り死ぬぞ！」

暗闇の牢獄（ダーク・キューブ）の周りは炎に囲まれ、エースをじりじりと炙っている。
と、ようやく勇者が魔術の中から出てきた。
その体はボロボロになっている。おそらく、火で囲む前にキールがやたらと撃ちまくっていた氷弾の嵐に巻き込まれたからだろう。

「やっと出てきたか」

キールは出てきたエースの元までつかつかと歩み寄る。
エースはすでに満身創痍で、剣を杖代わりに何とか立っている状態だ。

「クッ……」
「生意気な目だな」

エースの前まで来ると、キールは躊躇い無くエースが杖代わりにしていた剣を蹴り飛ばす。
バランスを崩したエースが地面に倒れた。
エースは悔しそうに地面に生えた草を握りしめながら小さくつぶやいた。

「俺の負けだ……」
「あぁ！？負けたからなんだよ」

だが、その言葉はキールに意味をなさなかった。
キールはエースを踏みつけたまま、その場を動こうとしない。

「俺の負けだ、もうあんたを連れて行こうとはしない」
「だからなんだって。そんなもん当たり前だ。こっちは自分の体掛けてんのに、そっちは何も掛けなしで勝負してもらえたと思ってんのか？」

「なに？」
顔をあげたエースをキールは蹴った。
「こっちが体掛けてんだ。そっちも体掛けて当然だよな」
「クッ…そうだな」
「よし。なら今日からお前俺の奴隷な」
「「な！」」
偶然にもシルビアとエースの声が重なった。
一部始終を見ているサーニャは何故か顔を赤くし、恍惚とした表情をしている。
シルビアはそれを見なかったことにして、キールに話しかけた。
「待ってくださいキールさん！」
「なんだ？」
「確かにエースは負けましたが、しかし魔王を倒すと言う使命を神から授かっています。奴隷にされてはそれができません！」
「問題無い。俺が魔王城まで行く」
思わぬ返答にシルビアは固まった。同じく勇者もその場に踏まれながら呆然としている。
「気になることができた。だから魔王城へ行く」
「では私達と共に来てくれると言うことでしょうか？」
「こいつは俺の奴隷だ。こいつは俺についてくる。俺はシルビア、お前について行ってやる。もちろんサーニャも一緒だ。パーティーのリーダーはお前がやれ」
「本当にいいのでしょうか？」

旅の目的が変わらない以上、これはこの上ない申し出だ。エースには悪いが、魔王を倒さなくてはならない以上ここで留まっているわけにはいかない。

「構わない」
「ではよろしくお願いします。サーニャさんも」
「はい、よろしくお願いします」

そう言ってキールに深くお辞儀した後、サーニャと握手を交わす。
すると、キールがエースから足をどけた。

「さて、じゃあ旅の準備はサーニャに任せる」
「はい、承知しました」
「キールさんは何を？」
「これの調教だ」
「……調教？」
「そうだ。奴隷になる以上、反抗されるのはたまらんからな。徹底的に調教する」
「はぁ……」

シルビアはうなずくしかできなかった。
ここまで最強と思われる力をふるってきた勇者を、いとも簡単に倒してしまえる存在に抗おうとは思わない。
弱肉強食の中生き抜いてきたシルビアにしみついている感性だ。

「ではシルビア様、少し準備のために手伝ってほしいことがあるのですが？」
「何？あと様はいいわ。もう仲間なんだし呼び捨てにして。敬語もなしね、もちろんエースに対しても」
「分かったわ。じゃあちょっと手伝ってほしいの」

「ええ。よろこんで」

シルビアとサーニャはエースを置いて、家に戻ってゆく。

「さて、調教の始まりだ」

「ひっ……」

今のエースはただ怯えるしかできなかった。

二人は僧侶と出会い、勇者は現実を知る。２（後書き）

ちょっと勇者をイジメ過ぎたでしょうか……書いてて哀れに思えてしまいました。
でもやめません！

メイドは剣士と準備し、勇者は目覚める。

キールは苦虫を噛み潰したような表情で、目の前に横たわるエースを見ていた。
その光景をシルビアとサーニャが、お茶を飲みながら横目に見る。
シルビアは苦笑といった感じで、サーニャはいたって普通だ。

結果的に言えば、勇者の調教は失敗に終わった。

「ハァハァ／／／」
「……やりすぎたか」

僧侶の呟きには焦りが見え隠れしていた。

「キール様。いつもの調子で調教されては、こうなるのも当然かと。あれは魔物用であって人用ではありませんので」
「勇者なんて人じゃないようなもんだろ。だから大丈夫だと思ったんだがな」
「もっと罵倒してください！」
「一応は人だったと言うことでしょう」

魔物用の調教とは何なのか、シルビアには非常に気になるところだが、今はそれ以上に確認しとかなければならないことがある。

「キールさん。エース使いものになるんですか？」
「当たり前だ！俺は勇者だぞ！」
「ああ、それは問題ねぇだろ。多少性癖が変わったからむしろ強くなったんじゃねぇか」
「それは傷を付けられても喜ぶからということでいいのでしょうか

……」

先ほどから会話に挟まってうるさかったエースをキールは蹴って気絶させた。

多少ですむかは分からないが、勇者はMに目覚めた。
Mそうマゾヒズム。
肉体的苦痛や精神的苦痛を性的快感に置き換え、性的興奮を覚えることのできる人間だ。
苦難を乗り越えて栄光をつかむような英雄タイプの人間には、最適な性的嗜好と言えるだろう。
勇者ももちろん英雄のくくりに含まれるのだから、ある意味強くなったと言うのは正しい。

「まあ、こうなっちまったもんはしかたねぇ。幸い俺の命令には従順になったからな。当初の予定通り、明日には出発できるだろ」

勇者の調教が始められて今日で一週間。その間、シルビア達は教会で寝泊まりしていた。
食料は教会の備蓄や、村人たちの寄付でずいぶんと余裕があったが、そろそろ旅立たねばいけない。そのため、寄付をくれた村人にはその事を説明し、これ以上寄付を持ってこないように言ってある。

「そういや、明日からどこに行くか聞いて無かったな」

シルビアはサーニャにはすでに伝えていたが、教会の地下室にこもってエースの調教をしていたキールにはまだどこへ向かうか行っていなかった。
シルビアは確認の意味も込めてサーニャ同席で、もう一度説明することにする。

「今後私たちは南へ向かうことを目標としています。先読みの魔女様の預言でキールさんに会えたように、今後も魔女様の預言をあてに行動していくつもりです」
「そうか、なら一回王都まで戻るのか？」
「いえ、この村に来る前に立ち寄った村から南へ続く通商路があります。そこから南下していこうと考えています」
「そういうことなら異議は無い。なら荷物はその村に付く分の食料を持っていけばいいな」
「それですが、出来るだけ多くお願いします。以前寄った時、その村は魔物に襲われた後でした。私とエースで襲った魔物は駆除しましたが、蓄えを使って冬を越すのはギリギリと言ったところでした。なのでこの村で補給をするのは難しいと考えています」
「出来るだけ多くつっても、教会にある備蓄はあらかた無くなっちまってる。サーニャ保存食後何日分ある？四人で食ってだ」
「三日が限界と言ったところだと思います」
「だそうだ。ここから持ってけるのは三日分。後はどうする？」
「通商路は森沿いに続いてるとのことなので、そこで動物を狩るしかないでしょうね」

魔物や動物対策になるべく開けた所につくられることが多い通商路だが、この周辺はどこもかしこも森ばかりで、草原が無い。そのため通商路も森の木を切り倒して作った道になっている。ならば森の動物も近くにいるだろう。
シルビアとエースは、ここに来るまでも何度か野宿はしたし、動物を狩って食べ物を手に入れたりもしていた。
これも騎士団で訓練したことだが、実際に使う機会があると、本当に覚えておいてよかったと実感していた。
「だいたいは分かった。サーニャも把握してるみてぇだし問題ない

だろ」
「ではこの予定で行きたいと思います。明日は明朝出発でいいでしょうか？」
「問題無い。ウジ虫にはシルビアから言っとけ。俺が言うとまたトリップしかねん」
キールの苦渋にシルビアは苦笑した。
「分かりました。エースには私から伝えときます」
「頼んだ。俺はやることがあるから行くぞ。サーニャ準備は任せる」
「はい。行ってらっしゃいませ」
そう言ってキールは教会から出て、村の中心に向かって行ってしまった。

「キールさん用事ってなんだろう？」
「村に結界を張るんですよ」
「結界？」
「はい。現在この村は高齢者ばかりであまり若い人がいませんから、もし魔物が来た時のために魔物避けの結界を張るんです」
「でも村の人は魔物なんて全然いないって言ってたわよ？」
「それはキール様がいたからですね。悪魔と契約していたキール様がこの村におられたので、その気配に魔物達が近寄って来なかったんです」
その説明でシルビアはようやく納得した。
魔物は悪魔より下位の存在だ。
悪魔がいれば、その近くに魔物が寄ってくることは無い。
だからキールが来てから、何もしなくても魔物達はこの村を襲うことは無かった。

だが、キールが村から出てしまえば、じきに悪魔の気配も薄くなってゆく。そうした時に魔物達が戻ってくるのは明白だ。
キールは今それの対処法として、村に魔物避けの結界を張りに行ったのだった。

「キールさんって言葉遣いとか態度とか怖いけど、結構いい人だよね」
「私の主人ですから」

サーニャはそう言ってほほ笑んだ。
それにつられてシルビアも笑った。
二人の視界の隅にある、ボロ雑巾の様になった勇者を見なかったことにして。

メイドは剣士と準備し、勇者は目覚める。（後書き）

少しでも気に入っていただけたら、ご意見、ご感想、評価などお願いします。

僧侶は盗賊に絡まれ、拳闘士は惚れる。１（前書き）

三パート編成です。
少しずつサーニャの秘密がわかってくる？

僧侶は盗賊に絡まれ、拳闘士は惚れる。1

一行が旅を初めて三日。
案の定、立ち寄った村は備蓄がギリギリだったため、そこで補給を受けることはしなかった。
そのため、その村に泊まることは無く、そのままの足で通商路を南下し始めた。
そして、今日で持ってきていた保存食が無くなる。

「今日の分と明日の朝の分で持ってきた食材はおしまいです。明日からは、狩りをしながらの移動になりますね」
「そうね。サーニャさんのおかげで料理は心配ないみたいだから、私たちは動物を狩るのに全力を出せばいいわけね」

エースもシルビアも料理はとんとダメだった。
旅をしている間に備蓄が無くなった場合、今回と同じように動物を狩って食材にしていたが、せいぜい捌いて肉を焼くのが限界だ。
それ以上にこだわろうものなら、確実に貴重な食材をダメにする自信が二人にはあった。

「それにしても、この結界は凄いわよね」

そう言ってシルビアは自分たちが野営している周辺を見回す。
辺りはすでに暗く、たき火の明りと月の明かりだけが唯一の光源だ。
そんな中、野営地のたき火を中心とした約半径二百メートルの範囲内が、ぼんやりと淡く光を反射している。
キールの張った結界だ。
野営の一日目に見張りの順番を決めようとした時、キールが出した物が、この結界である。

「魔物も動物も人間も全部拒絶する結界って一体何なのよ。こんなの私は聞いたこと無いわ」
「俺もだ。結構魔法については城にいる時に勉強させられたけど、結界って言ったらせいぜい薄いバリアー見たいなもんが限界だった。完全に遮断出来る様なものなんて伝承のなかでしか聞いたことが無い」
「勇者の魔力って相当大きいでしょ？それでも無理なの？」
「俺が結界を張ったとして、魔物だけならこの規模の結界でも防げるだろうけど、他の動物や人間を防ぐなんて到底無理だな」
「キールさんってホント何者なんですか？」
「俺は俺だ。面倒なこと聞くなら結界解くぞ」
「すみませんで「お願いします、もっと追い詰めてください！」
「ねえキールさん。これほんとどうにかできません？」
「我慢だ。俺もこらえてる」

調教によって覚醒した勇者のMは筋金入りだった。
もともと素質があったのか、今ではキールがすこしでも冷たいことを言うと、頬を上気させながら、もっと言ってくれと迫ってくる。
最初二日はそのたびに蹴って黙らせていたが、いかんせん勇者は固い。
キールの蹴りでも、なかなか気絶せず、むしろ喜びに打ち震える姿を見て、キールが蹴ることを躊躇うほどだ。

「さあ、皆さん食事の準備ができましたよ」

サーニャが日に掛けてあった鍋からスープをついでそれぞれに渡してゆく。
いくら南下の途中と言っても、このあたりの夜はまだ冷える。
あったかいスープは、夜の冷たさにとても嬉しいものだった。

「ありがとサーニャ」
「サンキューなサーニャ」
「これもメイドの務めですから」

サーニャはにっこりとほほ笑みながら二人にスープを渡す。

「キール様どうぞ」
「ああ」

キールはスープを受け取り、一口飲む。

「なかなか美味いぞ」
「ありがとうございます」

サーニャは、今度は万遍の笑みだ。
シルビアはそんなサーニャの姿を見ながら、二人の関係について考えていた。
サーニャの反応を見るに、サーニャがキールを好きなのは間違いない。
だが、シルビアにはキールの気持ちがよく分からなかった。
いつもサーニャが甲斐甲斐しく世話をしているが、お礼は言ってもその表情は変わらない。
いつも無表情だ。
肉体関係があるのは知っているから、キールもサーニャの気持ちは分かっているのだろう。
二人の関係の謎は深まるばかりだ。

「どうしました？」

シルビアがじっとサーニャを見ていることに気づいて、サーニャは首を傾げた。

「あ、ううんなんでもない。スープ美味しいよ」
「ありがとうございます。おかわりもまだありますから」
「ありがと」
「おかわり！」

エースはすでに一杯目を食べ終え、二杯目に突入していた。

食事も終わり全員が寝静まった後、シルビアは小さな物音で目が覚めた。
寝るときはエースとキール、シルビアとサーニャに分かれて寝ている。
シルビアが隣を見ると、寝ているはずのサーニャの姿は無かった。

「どこ行ったんだろう？」

シルビアは目をこすり、辺りを見回す。
すると、サーニャが森の中に入って行くのが見えた。
いくらキールの結界があるとは言っても、暗い森の中は危険だ。
シルビアは起き上がり、そっとサーニャの後について行った。

サーニャは森の中を真っ直ぐに歩いてゆく。もうすぐキールの貼った結界の端が見えてくるころだろう。
サーニャはそこまで真っ暗で月の明かりも届かない森の中を、安定した歩みで進んでいた。
シルビアでもそのスピードについて行くのは骨が折れた。

「サーニャさんも結構謎が多いわよね。なんで僧侶にメイドさんなんかがついてるのか分からないし、力もかなり強かったし」

ちょうど結界の端が見えた時点で、サーニャは歩みを止めた。
そしてキョロキョロと辺りを窺う。
シルビアは一瞬、自分が付けているのがばれたのかと心配したが、どうやら違うようだ。
あたりを見るサーニャの姿は、誰かを待っていると言った様子だ。

シルビアは木陰に隠れてその様子をうかがっていた。
別に出て行っても良かったんだが、どうしてもこの後何が起こるのか気になってしまった。

ちょっとして、後方から葉を踏む音が聞こえてきた。
どうやら待ち合わせの相手が来たようだ。
そちらにもばれないように、シルビアは場所を移動する。

やってきたのはキールだった。
サーニャはキールが来ると、嬉しそうに———抱きついた。

「もしかして私かなり見ちゃいけないものを見ようとしてた？……」

シルビアは今に至って自分の失態を見抜いた。
少し考えればその予想も浮かんだはずだ。
サーニャはキールが好きで、キールもそれを気持ちは分からないが受け入れていた。
なんせその状態のことをシルビアは初めて教会に来た時点で聞いていたから。

サーニャはキールに抱きついたまま顔を上げると、そのままキールに口づけをする。
長い口づけだ。
そしてゆっくりと唇を離した。
キールを見つめるサーニャの顔を、月明かりが木の隙間を通り照らし出す。
その頬は上気し赤く染まり、目はキールからそらさない。
その光景にシルビアは目を離せずにいた。
無粋な興味では無い。シルビアが綺麗すぎて目が離せないのだ。
「（どうしよう、どうしよう。離れなきゃ、でもなんで！？足が動かない！？）」
シルビアは心の中で叫び声を上げながら、二人の光景を見続ける。
今度はキールからサーニャに口づけをした。
そしてサーニャをしっかりと抱きしめる。
唇を離すと、サーニャを背後にある木の幹に押しつけた。サーニャは抵抗をしない。
逆に求めるようにキールの首に手を回す。
続けられる男女の光景からシルビアは強引に視線を外した。
そのまま隠れていた木に座り込み、目をギュッと閉じ、両手で耳をふさぐ。
先ほどから聞こえてくるサーニャの官能的な息遣いが、頭の中から離れない。
シルビアはただその場にじっとしているしかなかった。

事を終えた二人はシルビアが隠れている木にやってきた。
当然のように二人はシルビアがいることを気づいている。
初めサーニャが抱きついた時に、キールはどうするか聞いたが、そのままでいいと言ったためシルビアを無視して事に及んだのだ。
そして全てが終わった後、こうして現実を拒絶し外界からの刺激を避けた状態のシルビアの前に立っている。

「（私の魅惑のせいで逃げれなくなってしまったみたいですね）」
「（こいつどうするんだ？）」
「（このまま眠らせてあげてください。その方があとでイジリがいがあります）」
「（お前も大概悪魔だな）」
「（ふふ、当然です）」

サーニャの提案通り、シルビアに睡眠の魔法を掛けた。
するとスッとシルビアの体から力が抜け、規則正しい息遣いが聞こえてくる。

「ではシルビアさんは私が運んで置きます」
「好きにしろ。俺は結界に掛かったバカを捕まえてくる」
「はい。よろしくお願いしますマスター」

僧侶は盗賊に絡まれ、拳闘士は惚れる。１（後書き）

パソコンが熱いです。夏場は保冷材と共に使わないと、排気ファンの出口が溶けそうです。
つい先日、机の一部が黒く焦げてました・・・

お時間がありましたら、感想・評価お願いします

僧侶は盗賊に絡まれ、拳闘士は惚れる。2

翌朝、シルビアが目を覚ますと、野営地の自分の掛け布がある場所だった。
隣ではサーニャが横になっている。

「……全部夢だった？」
「おはようございます。どうかしましたか？」
「ひゃっ！」

サーニャが起きているとは思わなくて、思わず変な声が出てしまう。

「ううん、何でもない。なんか変な夢見た気がしてね、少し寝ぼけてたみたい。おはよう」
「そうでしたか」

サーニャはいつもと変わらない笑顔でほほ笑む。
それを見て、シルビアは少し落ち着いた。

「では私は朝食の準備をしてまいりますね。今朝の分までは保存食が残ってますから。ただ午後からの食事は狩りをお願いします」
「うん、任せて。こういう時ぐらい剣士は活躍しないと」

シルビアは力瘤（ちからこぶ）を作ってウインクする。
すると、何か思い出したようにサーニャが突然振り返り、シルビアの耳元に口を寄せてきた。その光景にシルビアの脳内にデジャブが走る。

「あまり熱心に見られると恥ずかしいですよ」

そう言い残し、サーニャはたき火の元へ行ってしまった。
シルビアは顔を真っ赤にしてその場に停止する。

「夢じゃなかったの……」

真っ赤な顔を両手で押さえながら、呆然と呟くことしかできなかった。

川で顔を洗い、なんとかほてりが引いたので、やっと人前に出れるようになったシルビアは、たき火の元に来た。
すでにエース、キールはたき火の周りに座っており、サーニャは食事の準備を終え、シルビアを待っているところだった。

「待たせてごめんなさい」
「遅いぞ！俺は腹が減ってるんだ。こんなお預けゾクゾクするじゃないか！」
「いろいろ言いたいことはあるけど、とにかくごめん」
「さあ、食事にしましょ」

四人で朝食を終え、出発の準備に戻ろうとシルビアが席を立った時、キールに呼び止められた。

「ちょっと待て」
「な……なに？」

不自然にならないように返事したつもりが、カクカクになってしまっている。
これでもシルビアの中では現状で一番正常な動きだ。

「お前らに少し話すことがある。ちょっと待ってろ」
「話すこと？」

エースを無視してキールは立ち上がり、木陰に向かって歩いてゆく。
エースが無視されることに喜び、ビクンビクンしていたが、シルビアたちはなるべく視界に入れないようにキールの進む方向を見る。
そしてキールが木陰で何かを担ぎあげ戻ってきた。
ドサッと音がして、担がれていたものが全員の前に落ちる。
それは簀巻きにされた男だった。
ぼろぼろの服を着ているが、農民には見えない。と言うより服の傷はまだ新しいものばかりだ。

「ちょっと！この人どうしたのよ！」
「結界に当たってぶっ倒れてた」
「大丈夫なの？」
「命に問題はない。それよりシルビアはずいぶんとこいつにやさしいな」
「当たり前でしょ？私たちの結界のせいで傷ついたんだから」
「違うぞ」
「え？」

キールの言葉に思わず傷の確認をしていた顔を上げる。
キールはこいつなにを言ってるんだと言った様な表情でシルビアを見下ろしている。

「そいつの怪我は俺がやった。やけに暴れるしうるさいから、魔法掛けてボコボコにして黙らせた」
「暴れたって、もしかして盗賊かなんかだったの？」
「そうなんだろ。武器も持ってたからな。ま、俺には意味ないが」

「なら先に言ってよ！心配して損しちゃったじゃない」
「知るか。そっちが勝手に勘違いしたんだろ」
確かにそうなのだが、シルビアは釈然としない。
ぼろぼろになった人が目の前にいたら心配するのは普通じゃないのだろうかと、シルビアは思う。
もともと自分がコリーと共に孤児院に引き取られた時、二人ともぼろぼろで酷い状態だった。そんな所を助けてくれた孤児院の院長先生には感謝してるし、自分も同じように人を助けれるようになりたいとも願って育った。
その事も、シルビアが傷ついた人を助けたいと思う気持ちの一部になっている。

「とりあえず話したいのはそいつのことだ。こんな所に盗賊が一人でいるわけがない」

キールの言葉にエースが反応した。

「じゃあ、仲間が近くにいるってことか？」
「そうゆうことだろう。どうせ通商路を通る商人を狙って強奪してるグズな連中だ。いずれ国の連中に始末されるだろうが、
――――俺に絡んできた以上見逃す気はない」
「なら捕まえるのか？」
「全員ぶち殺す」
「それは過激すぎよ！私たちには力があるんだから捕まえて国に引き渡すべきだわ」

キールの発言にシルビアが真っ先に反対した。
エースもそれに続く。

「俺もそれは不味いと思う。だれか証人がいなけりゃ俺達が逆に野党扱いになるかも知れない」
「ならこいつは生かしておく。どうせ偵察に使われる程度の下っ端だ、グズで使えない捨て駒だろ。
だが他の奴らは別だ。盗賊はどのような罪状に問わず死罪が確定している。それをわざわざ国に引き渡す必要はない」
「確かにそうかもしれないけど……」
「なら決定だ。こいつ起こして隠れ家の場所吐かせるぞ」

キールが魔法を男に掛ける。
すると男は目を覚ました。
おそらく魔法で眠らされていたのを起こしたのだろう。そうでもなければ投げおろした時に痛みで目が覚めるはずだ。

「てめぇら！何しやがる離しやがれ」

男は簀巻きにされたままごそごそと地面をはいずる。
それをキールが上から踏みつけた。

「おいクズ。お前らのアジトはどこにある」
「はぁ？何言ってんだ坊さん。何のことかわかんねぇな」
「なら分からせてやる。サーニャちょっとそこの陰でお話聞いてこい」
「わかりました」

サーニャが男を引きずりながら、最初男を持ってきた木陰へと進んで行く。
そして三人から見えないところに行った。

「サーニャさんに任せて大丈夫なの？」

「問題ない。この手のことは俺よりあいつの方が上手い。俺だとつい殺しかねん」
「サーニャさんって何者よ……」
尋問の上手いメイドなど聞いたことが無い。
もしかしたら王宮に使えているメイドならその程度もできるかもしれないが。
すると、木陰から男の断末魔が響き渡った。
「本当に大丈夫なんでしょうね？」
「大丈夫だ。サーニャは拷問のプロだからな」
「尋問じゃないの！？」
「それは羨ましいな。一度経験してみたいぜ！」
戻ってきたサーニャの手には血痕が付いていた。
そして行きと同じように引きずられて帰ってきた男は歯が何本か折れており、白目を剥いて気絶してしまっている。
「どうだった」
「場所が分かりました。詳しい人数も」
「流石だ。なら出発するか」
「ここから割と近くですので、二十分も歩けばつきますが」
「ならここに荷物置いといて俺達だけで行った方がよくないか？結界があるなら俺達以外には入れないんだろ？」
「そうね。私もその方がいいと思うんだけど」
「そうだな。じゃあ荷物は置いてく。ウジ虫狩りだ」

僧侶は盗賊に絡まれ、拳闘士は惚れる。2（後書き）

お時間がありましたら感想・評価お願いします。

僧侶は盗賊に絡まれ、拳闘士は惚れる。3（前書き）

2の方と投稿する時の量を間違えました。
そのせいで3がかなり多くなっています。
今後こう言ったことが無いよう気をつけますので、今後ともよろしくお願いします。

（追記）手奇襲を敵襲に修正しました。

僧侶は盗賊に絡まれ、拳闘士は惚れる。3

盗賊たちのアジトはサーニャが言った通り二十分ほど森の中を歩くと見つかった。
どうやら洞窟を根城にしているようだ。
拷問した男の話によると、盗賊は割と食料を溜めているらしく、一行は殲滅ついでに食料も頂いて行くことにしていた。
そしてシルビアは今、盗賊たちを皆殺しにすることにためらいが無くなっていた。
それは男によってもたらされた情報を聞いてからだ。

その情報は、盗賊たちが獣人族の少女を捕まえて、売りさばこうとしているというものだ。
獣人族は人間の体に、一部が動物となっている種族だ。
女性は耳や尻尾をはやしているその姿から、一部の貴族の男達に非常に人気が高く、違法に捕まって奴隷にされることがあると聞く。
どうやら、商人の護衛として雇われていたのか、旅の途中で盗賊たちに襲われたのか分からないが、捕まってしまい奴隷商人に引き渡される予定だと言う。
まだ奴隷商人には渡されてはいないが、洞窟に作られた簡易牢屋に捕まっているとのことだ。

それを聞いた瞬間、シルビアの頭の中から躊躇が消えた。

「男の情報通り、入り口に見張りは三人。後は中にいるようですね」
「全部で何人だったっけ？」
「四十人程度です」
「なら下僕、お前が入口で騒ぎ起こせ」
「はい分かりました」

エースの反応は調教により刻み込まれた条件反射だった。

「その間に俺が中に入って殲滅と、ついでにその獣人を助け出す」
「私はどうする？一緒に突入する？」
「お前がいても邪魔なだけだ。適当に下僕のサポートしてろ」
「わかったわ。サーニャも外で待ってればいいのね」
「そうだ」
「承知しました」
「よし下僕、行って来い！」
「はい！」

エースはやはり条件反射で草むらから飛び出すと、洞窟の入口にいた見張りの一人に切りかかった。
突然の奇襲に一人目は対処できずに切られ絶命する。
エースはそのまま二人目の見張りに向かう。
そのころになってようやく我に帰り、見張りは敵襲を告げた。
しかし、敵襲を告げた時点で、すでに二人目は絶命した。
その確認もそこそこにエースは最後の見張りにむかって突撃する。

その光景を見て、シルビアは「やはり勇者なんだな～」と思い直していた。
最近のエースは、言っては悪いが非常に見苦しいものがあった。
調子に乗り、威張り、命令する。
それを繰り返したのち、キールにボコボコにされ調教された。
その後も調教の影響でMに目覚めてしまい、非常にいたたまれない状態になっていた。
理由を知らない女性が見たら、一発で嫌われていただろう。
だが今、盗賊相手に剣を振るエースの姿は、紛れもない強き正義の

勇者だった。

エースが三人目を切り伏せたころで、中から敵襲を聞きつけ男たちがわらわらと、手に手に武器を持って出てきた。ざっと二十人と言ったところだろう。他のメンバーは中にいるようだ。
それを見て、シルビアが草むらの中で腰を上げる。
飛び出せる体勢を作って二人に声を掛けた。

「じゃあ、私も言ってくるわ。大丈夫だと思うけど気をつけてね」
「シルビアも気をつけてくださいね。相手は盗賊と言っても油断はできませんから」
「もちろん」

そう言ってエースに気をひきつけられている盗賊団の後ろから強襲した。

盗賊団がエースとシルビアに集中するのを確認する。

「さて、俺も行くか」
「言ってらっしゃいませ、マスター」
「派手な魔法を使うかもしれん。魔力だけは高めておけ」
「承知しました」

キールは自分に透明化の魔法を掛けて姿を消すと、洞窟の中に悠然と忍び込んで行く。
洞窟は意外と大きく、人が横に四人並んでも余裕を持って歩けるほどの大きさだ。
その中にどんどん進んで行くと、分かれ道を見つけた。
片方からは声が聞こえる。
もう片方は、声は聞こえないが明りがついているのが見えた。

キールは躊躇わず声の聞こえる方向へ向かう。どうせ全滅させるのだ。ならば人のいる方向へ向かうのが手っ取り早いと考えた。

声が聞こえた方向に進むと、そこには男が一人と獣人の少女が一人いた。

男は下卑た笑い声を上げながら、牢屋に閉じ込められた少女に話しかける。

「こりゃ高く売れそうだ。残念だったな。お前は貴族様に買われて一生ペットだ。まあ運が無かったと思って諦めな」

「ううう……」

少女はただしなだれ、嗚咽をこぼすばかりである。

「チッ、はずれか」

キールは透明化の魔法を解き、姿を現す。

突然現れたカソックの男に、男も少女も驚きの声を上げた。

「誰だてめぇ！見張りはどうしやがった！」

「知るがゴミ。空気がけがれる息をするな」

キールが手を水平に一振りすると、男が急に苦しみ出した。

「そうだ、それでいい」

「かっ、なにしや……」

男は最後まで言うこともできず絶命した。

そしてキールは牢屋に向かう。

一応は助けると言ってきたのだ。そのまま放っておく訳にもいかな

い。
少女は今起きている出来事に理解が追い付かず、目を白黒させていた。

「ほら、助けに来たんだから早く出ろ」

キールは近くに掛けてあった鍵を使って牢屋の扉を開き、中にいた少女を外にだした。
少女は最初怯えていたが、キールに悪意が無いと分かると、大人しく牢屋から出てきた。

「あの、ありがとうございます」
「いい。それより離れるな。いまからここの連中全員殺す」
「は、はい」

来た道を戻り、今度は明りだけがついている方向へ向かう。

「この先何があるか分かるか？」

キールは期待半分に少女に聞いた。
捕まっていたのなら、少しは洞窟の内情をしっていてもおかしくない。
案の定少女はその問いに答えた。

「この先は盗賊の寝室と談話室になっているはずです」
「そうか」

外の陽動で出てきたのが二十人程度。サーニャの言っていた人数が四十人だったから部屋の中にざっと二十人はいる計算になる。
奥に進むとやっと人の声が聞こえてきた。

どうやら簡単な扉が付けられており、それが閉められていたせいで声が聞こえなかったようだ。

「ここか。サーチ」

キールは一室に向けて純粋な魔力を放つ。
それは生き物の反応だけを探知し、キールに教えてくれる簡単な魔法だ。
魔力量が多くなければ狭い範囲しか分からないが、悪魔と契約したキールなら、その魔力量も一般の魔法使いとはケタが違う。
キールはサーチを使い、部屋の中にいる全員の位置を特定した。

「あの何を？」
「気にするな、見ていろ」
「あ、はい」

少女の問いに答えず、指示だけを出す。
そしてキールはおもむろに部屋の扉を蹴り開けた。

バタン！と大きな音がして扉が倒れる。
簡易的に作られた扉は、キールの蹴りの威力に堪えれず、開くこと無くそのまま倒れた。

「脆いな……まあいい注目は集めれたようだ」
「なんだてめぇ！」
「外の連中はどうなった！」
「捕まえて吐かせちまぇ！」

部屋にいた男たちが一斉に騒ぎ出す。

「おい、あの女前捕まえたやつだぞ」
一人の男が目ざとく少女に気づいた。
その声に少女がビクッと反応する。
「てめぇ助けかなんかか」
「僧侶だ」
「バカにしてんじゃねぇぞ！この人数に勝てると思ってんのか」
部屋の中にはほぼ全員がそろっていた。それは当然キールも知っている。
「ドブネズミどもがいくら束になっても、所詮はドブネズミだ！ドブネズミらしく泥にでもまみれてろ！
氾濫の水は世界を嗤う。激流の汚泥（スラッジ・ストリーム）」
キールが呪文を唱えた瞬間、洞窟のむき出しの土から突然水があふれ出した。
その水は周りの土を巻き込み、泥水となって一気に盗賊たちを押し流してゆく。
「なんだこれは！」
「水だ！外に出せ！」
「逃げろ！溺れちまう！」
盗賊たちは三者三様に叫びながら泥水から逃げまどう。
それをあざ笑うかのように、キールに操られた泥水が次々と盗賊たちを飲み込んで行った。
部屋にいた二十人あまりの盗賊は、一瞬の内に水にのまれ洞窟の内壁に叩きつけられて気絶した。

それを見たキールは魔法を解き、水を消す。
うめき声を出しながら盗賊たちは起き上がる様子を見せない。
「この程度か。所詮はドブネズミ、泥にまみれるのがお似合いだな」
「てめぇ」
一番意識のはっきりしている一人が、キールをにらみつけた。
だがキールは気にした様子も無い。
「そろそろお終いだ。死ねドブネズミども
大地を揺らし世界を噬え。激震（グラウンド・トレマー）の一手」
大きな衝撃と共に、男達の集まっていた部屋の天井が崩落した。
大きな土煙を上げてキールたちにも迫るが、それはキールが魔法で作った風の流れで全ていなされる。
「これでここにいた奴らは全員死んだ。他の場所にいる奴はいるか？」
「いないと思います」
少女の目がキールを見ながらやけにきらきらしている気がしたが、キールは気にしないことにした。
最近変な人間ばかりに会う気がするが、キールは自分を曲げようとは思わない。
鬱陶しければ消せばいい。邪魔をするなら排除するだけだ。
「なら外にでるぞ」
「はい！」

そとではすでにエース達が盗賊を全員切り殺した後だった。

「こいつが捕まってた獣人だ」

「大丈夫だった？」

「問題無い。こいつにも怪我はないようだ」

「よかった。この子の名前は？」

「そういやまだ聞いて無かったな」

少女はそこで初めて自分の名前を名乗った。

「私はトモネと言います。旅をしながら拳闘士として修行をつんでいたのですが、先ほどの盗賊団に商人と移動をしている所を襲われて捕まってしまっていたんです」

トモネは襲われた時のことを思い出して、耳としっぽをシュンとさせる。

その仕草はどこか猫を思わせる。

「あなたは獣人よね？」

「はい。私は猫の獣人です」

「どうして獣人が旅をしながら拳闘士を？獣人はほとんど生まれた村から出ないって聞いてたけど」

「私の村にいた僧侶様に言われたのです。拳闘士として旅をすればきっと素敵な出会いがあると」

「それで捕まってりゃ世話ねえだろ」

キールは呆れてトモネを見る。

「でも素敵な出会いがありました！私を一緒に連れて行ってくださ

い！」
「んあ？何言ってんだ？」
「さっきの戦いを見てて思ったんです。私はあなたのもとで修業をしたいです！」
「俺は僧侶だ。拳闘士なんか知らん」

キールは全力でトモネと意見を拒む。
しかし、女性二人がトモネを援護してきた。

「まあまあいいじゃない。お告げ的にも拳闘士が仲間になるなら一歩前進よ？」
「ここはシルビアの意見に私も賛成です」

シルビアに正論を言われ、サーニャにも言われると、流石のキールでもわがままは通せなくなってしまう。
それにもともとこのパーティーはシルビアのパーティーだ。メンバーの決定権はシルビアにある。

「チッ。分かったよ。好きにしろ」
「ありがとうございます！」
「私はシルビア。剣士をやってるわよろしく」
「サータニアンと申します、サーニャとお呼びください。キール様のメイドを務めています。よろしくお願いしますね」
「俺がキールだ」
「みなさん、よろしくお願いします！」
新しく拳闘士がパーティーに加わった所で、今まで木陰で休んでいた勇者がやってきた。

「ハアハア。痛気持ちいい。これだから戦いは止められない！」

体中に切り傷を付けて、興奮している。

「ヒッ！変態！」

ドスッ！と重い音とともに、トモネがとっさに出した拳がエースの鳩尾に入った。

エースはそのまま地面に崩れ落ちる。

「あら、なかなかいいストレートを持っていますね」

「そうね。これならいい戦力になるんじゃないかしら」

サーニャとシルビアがのんきにトモネの拳を評価していた。

僧侶は盗賊に絡まれ、拳闘士は惚れる。3（後書き）

お時間があれば感想や評価お願いします。

番外編：コリンの日常（前書き）

と言う訳で番外編です。
息抜きに何か書こうと思ったら、コリンが動きたいと言うので思わず書いてしまいました。

そしてコリンちゃん、市場の男たちにモテモテです。市場はロリコンばかり！

番外編：コリンの日常

「お姉ちゃん面白そうな旅してるな～」

手紙から顔を上げて、コリンは羨ましそうに呟いた。
ここはコリンが経営を任せられている店。業種は雑貨店とでも言えばいいのだろうか。多種多様なものが置かれている。
そんな中にコリンは一人、姉から貰った手紙を読んでいた。

「危ない僧侶さんに可愛い獣人の拳闘士か～、個性的すぎるよね～お姉ちゃん埋もれてないといいけど……」

多少ずれた心配をしながら、コリンは店の中をぐるっと見回す。
今日は開店してから昼まで一人も客は来ていない。
雑貨店と言っても、市場に行けば大抵の物はそろうし、店のある場所は市場の片隅。こんなところまで足を運ぶお客は少ない。
すると一人の男が店に入ってきた。

「コリンちゃんいるかい？」
「お～、いるよ～」

店に入ってきたのは果物屋のおじさんだ。
シルビアが旅に出た翌日位から、時々顔を出してくれるようになった。
手には何種類か果物の入ったバケットが握られている。

「今日も可愛いね。はい、これお土産」
「お～ありがとう。今切るからおじさんも食べてって」
「悪いね。ありがたく頂くよ」

果物を食べながらおじさんと世間話をし、三十分ぐらいするとおじさんは、仕事が残っているからと言って帰って行った。
いつも同じ時間帯に来ていることから、コリンは休憩のときにでも来てくれているのだろうと予想を付けていた。そこで今こっそりとお茶を入れる練習をしている。
休憩のときに美味しいお茶を振るまって、すこしでも疲れを取ってもらう作戦だ。

しばらくすると今度は喫茶店のお兄さんがやってきた。
見た目はおじさんっぽいんだが、本人がお兄さんと言わないと怒るのだ。
だから仕方なくコリンもお兄さんと呼んでいる。

「やあコリンちゃん」
「いらっしゃいお兄さん」
「やっぱりコリンちゃんの声はいやされるね～」

お兄さんはニコニコとしながらコリンに持ってきた袋を渡す。

「はいこれお土産。家で出してるサンドイッチだよ」
「お～ありがとう。今果物屋さんから貰った果物があるから」
「（チッ、あの野郎また来てやがったのか）」
「なにか言ったか～？」
「なんでもないよ、こっちの話し。それで今日の調子はどう？」

お兄さんはニコニコと笑顔を絶やさず話す。
コリンも果物を切りながら、それに答える。

「今日も閑古鳥がないてるよ～、なかなかお客さん来てくれないね

～」
「ここは市場の端っこだからやっぱり難しいね。大々的に客引きすれば少しは何とかなるかも知れないけど、一人だとどうしてもやれることに限度があるからね」
「そうなんだよ～、いい方法無いかな？」
「家でよければ簡単に宣伝ぐらいなら出来るよ？」
「本当！？それはたすかるよ～」

切り終えたリンゴを出しながら、ふにゃ～っとほほ笑む。
コリン独特の力の抜けた笑顔だ。
この笑顔を向けられた人は、すべからくコリンの笑顔と虜になると言われている。そしてその笑顔を得るためならばどのような努力も惜しまないらしい。（お兄さん談）

「任せときなって」

そして少し世間話をした後、いつものようにお茶の入れ方を練習する。
喫茶店のマスターだけあって、お兄さんのお茶の入れ方は非常に上手い。
それを真剣に学ぶコリンの腕もメキメキと上達していた。

「じゃあ俺は店があるからそろそろ帰るよ」

一時間くらい練習に付き合って、お兄さんは帰って行った。
時刻は午後四時前。
そろそろ日が傾いてくるため、店じまいの準備だ。
コリンはまだ十二歳のため、夜六時以降の営業が認められていない。

「今日もお客さん来てくれなかったな～」

店の前でボーっと道行く人達を見ながら呟く。

「あの、すみません」

すると突然横から声を掛けられた。

「はい、なんでしょう」

コリンは驚いて思わず普段は意識しても出てこない敬語が出てしまった。

「ここって雑貨屋さんでいいんでしょうか？」

「はい、そうですよ」

「もう店じまいですか？」

女性はコリンの持っている営業中の縦板を見て聞いてきた。

「いえ、まだ六時まではやってますよ～」

コリンはやっといつもの調子に戻りながら言う。

今日初めての客だ。なんとか何か買ってもらいたい。

そう思いながらコリンは女性を店の中へ案内した。

「本当に色々なものがあるんですね」

「あんまり量はそろえれなかったけどね～。そのかわり品数は多くそろえたつもりだよ～」

コリンは定位置について、店の中を色々と見て回る女性を見ながら話す。

「どんなものをお姉さんは探しているの～？」
「えっと、櫛なんですけど」
「櫛ならそこから向かって左側の棚の上から四番目にあるよ」
「あ、ありがとうございます」

コリンは店にある全ての商品と、その商品の置いてある場所を把握していた。
コリンには完全記憶能力があった。見た物をそのまま全て覚えてしまうのだ。
その能力があったからこそ商店などを始めることができたのだ。
普通だったら、十二歳の少女にけっして商店の経営など出来ない。

女性は一つ一つ櫛を手にとってじっくりと見ながら吟味してゆく。
そして一つの櫛で手が止まった。
コリンがその場から少し背伸びをして覗きこむと、シルビアがこれはいいものだと言って置いて行った櫛が持たれていた。

「これ、すごい……」

女性が小さく呟く。
コリンには櫛の価値が分からなかったが、それでもそれは他の櫛に比べるとかなり高い代物だ。
女性は迷わずその櫛をコリンの元へ持ってくる。

「これ、おいくらですか？」
「えっとそれは銀貨一枚だよ」

国の貨幣は全て金貨、銀貨、銅貨によって取引されている。
銅貨十枚で銀貨、銀貨が十枚で金貨となる。

一般的に銅貨三枚あれば一日は生活出来るなかで、銀貨一枚は櫛としてはかなり高い値段だ。

「そんなに！」

やはり女性は驚いていた。
他の櫛が銅貨一枚から最高でも三枚のなかでそれだけが銀貨一枚なのだ。
かなり高い部類だ。値段を聞いたら買うのをやめてしまうだろう。
コリンはそう思って不安になっていた。

「そんなに安くて良いんですか！？」

だが女性はコリンの想像とは別の意味で驚いていた。

「これってハーミントンのオリジナル作品ですよ！？普通に買ったら銀貨五枚はしますよ！？」

コリンにはハーミントンが誰なのか分からなかったが、女性がかなり驚いていることと銀貨五枚と言う価格から、相当な人物なのだろうと辺りを付ける。
だが、ブランドを気にしないコリンにはその意味がよく分からなかった。
コリンの考えでは櫛は櫛である。
その中の優劣は使いやすいか使いにくいかの違いだけだ。

「いいよ～」
「でもそれだとこちらが悪い気が……」
「そんな風に言ってくれるお姉さんなら、きっとその櫛も正しく使えるんでしょ～。だからいいよ～」

「ありがとう。ならこの櫛はありがたく頂くわ」
そう言ってお姉さんはポケットから銀貨を一枚取り出すしコリンに渡した。
そして言葉を続ける。
「そう言えばこのお店って注文は取ってくれるのかしら？」
「どんなもんを～？物にもよるけど、だいたいは取れると思うよ～」
コリンの仕入れ先は無駄に広い孤児院のネットワークだ。
孤児院から出て行った子供達が成長し、それぞれに仕事を見つけ働いている中、コリンは彼らの作ったものを売ることを職業にした。
それは彼らにとっても自分の物が人の目に触れる数少ない機会だったため、拒否することは無く、とんとん拍子に事は進んだ。
結果、量は手に入らないが、品数だけは以上に多い店が完成したと言うわけだ。
「私ね、この街で美容院をやろうと思ってるの」
「美容院？」
コリンには聞いたことのない言葉だ。商業をするため、ある程度のことを勉強したつもりだが、まだまだ知らないことは多い。
「髪を切る場所よ。専門の人が切ることで、より綺麗な髪型にするの」
「へ～、そんな所があるんだ～」
コリンが髪を切ると言えば姉のシルビアの役目だ。それならばお金もかからないし、安心できる。
知らない誰かに刃物を持たせて、自分の頭の回りで動かすなんて、

コリンには怖く思えたからだ。

「それでタオルが沢山いるの。市場でも色々聞いてみたんだけど、なかなか安定して手に入るところが無くて」

「タオルか～。家が仕入れてる所だと三つあるけど、どれも手作業だから沢山は難しいかな～」

「やっぱりそうなのね。他の所も同じようなこと言ってたわ」

「タオルじゃないといけないの～？他に代用品とか～」

「髪を切る時に毛が下に落ちるでしょ？それが服に掛からないようにするためにタオルを首の周りに巻くのよ。だからタオルじゃないと難しいわ」

それを聞いて、コリンはあることを思い出した。

それはたまたま孤児院の一人に、何か面白そうなものはないか聞いた時の話だ。

なんでも冒険者用のマントを作ろうとして、頑丈さを優先して魔法で布の肌理を細かくしすぎた結果、つるつるのマントができたという話だった。

それをコリンはお姉さんに話してみる。

するとやはりお姉さんは喰いついた。

「それ今手元にあるかしら？」

「あるよ～」

コリンは立ち上がり、マントのしまってある棚からお目当ての品を取り出しお姉さんに渡す。

「これは凄いわね。つるつるじゃない」

「な、凄いでしょ。これなら髪の毛とか切っても布に引っ掛からんよ」

「そうね、これならさっと掃うだけで残った髪も全部落ちるわ。これは私の求めていたものよ！」

お姉さんは嬉しそうにマントを抱き締める。

「これどれぐらい用意したらいい～？」

「そうね、まず私一人で始めるつもりだからあんまり数はいらないわ。すぐに使い回しができるみたいだし、タオルほど数はいらないわね。とりあえず五枚って所かしら」

「それなら一週間あれば準備できると思うよ～」

「ならお願い。また一週間後に取りに来るから」

「値段は聞かんでも大丈夫～？」

「大丈夫よ。あの櫛の値段だもの、きっと適切な価格より安いわ」

「変に期待されても困るよ～」

コリンはお姉さんの浮かれように苦笑しながら、値段をきめるのだった。

翌日、その話を果物屋のおじさんと喫茶店のお兄さんに話したらこっぴどく怒られた。

番外編：コリンの日常（後書き）

貨幣の価格はその場の思いつきで決めてしまった……今後矛盾が出なければいいが

銅貨一枚で三百円程度だと思ってもらえればいいと思います。

そう考えると一万五千円相当の櫛。ハーミントンお前一体何者なんだ……

メイドは魔物と再会し、僧侶は楽しむ。１（前書き）

せっかく新メンバーが増えたのに今回の話はメイドが主役！

次の話には活躍してもらいたいな

メイドは魔物と再会し、僧侶は楽しむ。1

トモネを仲間に入れた一行は、再び通商路を通って南に進んでいった。

そして二日目の昼には、東と南をつなぐ通商路のちょうど中継地点に到着した。
そこには村があり、商人を相手に宿を経営したり、飲食店を経営していたり、馬車の整備や馬の売買などを行っている。

「ずいぶんと賑やかな村ね」
「私もここを中継しましたが、商人を相手にしているのでお金の回りがかなりいいそうです。ただ商人気質が写ったのか、私も商品に見られそうになりましたが」

トモネが耳をショボンとたれさせてうなだれる。

「あらら気の毒に。でも今は大丈夫よ。もう私達の仲間なんだもの」
「そうだぜ。なんたって勇者の一行の仲間なんだからな。変なことしようものなら、速攻で国に指名手配されちまう」

シルビアがトモネをやさしく抱き締め、頭をやさしく撫でる。

「うう……ありがとうございますシルビアさん」
「このスルーっぷりがたまんねえぜ」

トモネは、最初の出会い方が最悪だったエースを、完全にいないものとして扱っている。
そして、その行為をトモネの放置プレイだと解釈したエースは、毎

日身もだえていた。
そんな光景を見続けるキール、サーニャ、シルビアの三人はうんざりしていた。

「とりあえず、私たちが止まれる宿を探しませんか？お金はあるとはいえ、通商路なら宿泊客も多いでしょうから」
「それもそうね。なら宿を探しましょう。どこに宿があるか、近くの人に聞いてくるわ」

シルビアはすぐにグループから離れ、露店に近づく。

「あのすみません」

シルビアが声を掛けたのは、小さな露店だ。青年が一人で切り盛りしているが、他の場所がにぎわっているのにもかかわらず、そこだけは人がいなかった。

「あ、はい。いらっしゃい！」

青年はシルビアに気づくと威勢よく答える。

「ここの町で五人が止まれる宿ってありますかね？」

シルビアが客じゃないのが分かると、青年は目に見えて落胆した。しかし根がいいのか、シルビアの問いには素直に答えてくれる。

「ここは商人目当てにかなりの人が宿を経営してるから、どこに行っても大抵止まれると思うよ。まあ、法外な値段をふっ掛ける店もたまにあるから、借りる前に値段だけは確認しとくといいよ。普通に朝食付きで一泊止まるだけなら、だいたい銀貨一枚で止まれるか

ら」
「ありがと。そうだ、ここはどんな商品置いてるの？」
シルビアは親切に教えてくれたお礼に何か買おうと考えた。
だが、青年の露店にはほとんど商品が置いていない。
「悪いけど、今品薄でほとんど在庫が無いんだ。いつもは冒険家から洞窟や遺跡で発掘してきた宝石や魔結晶を取り扱ってるんだけど……
今あるのはここにある魔結晶が一つだけなんだ」
青年は懐から小さな黒く光沢のある結晶体を取りだした。
魔結晶はその名の通り、魔力が結晶化したものだ。魔法使いが自身の魔法の威力を高めるため杖にはめ込んだり、はたまた直接、魔結晶自体に魔法を組み込んで、それをいつでも発動出る状態にして持ち歩いたりする。この、何時でも誰でも発動できるようにした魔結晶の事を、魔法源と言って魔結晶と区別している。
「品薄って冒険者から買い取れなかったの？」
「いや、冒険者たちが魔結晶や宝石を手に入れれなかったんだ。最近、冒険者たちが小遣い稼ぎに行く遺跡に、強い魔獣がすみついたらしくてね。その魔獣が、ここを通る冒険者たちじゃ太刀打できないそうなんだ」
「冒険者でも太刀打できないとなると、魔獣と言うより魔物じゃないの？」
魔物と魔獣は別の物だ。魔物の方がはるかに強い。だが一番の違いはその生まれ方だろう。
魔獣が一般にいる獣に魔力が宿り暴走した姿で、魔物はその名の通り、魔力そのものが生物の形を取った状態の物のことを言う。

魔王が支配出来るのはこの魔物の方だ。魔王は魔力を自在に操ることができ、魔力そのものである魔物も当然操ることができる。

「でも魔獣を実際に見た冒険者もいるんだ。その人の話しだと、魔獣は鹿が素体になっているらしいよ。凶暴になって、頭の角が何本も生えてるんだって。それで突き刺してくるそうなんだ。冒険者たちも怖がって、誰も遺跡に入らなくなっちゃったから、こうして品薄状態になってるのさ」

「冒険者で集めて倒そうとか、ギルドに依頼しようとはしなかったの？」

「町からギルドには連絡したらしいんだけど、最近いろんな所の魔物や魔獣が活発になってて、ここまで手が回らないみたいなんだよね」

「おい、シルビアいつまで掛かっている」

そこにいつまでたっても戻って来ないシルビアに、しびれを切らしたキールがやってきた。後ろにはサーニャとトモネもついてきている。エースは何故か最初に待っていた場所で腹を抱えてうずくまっていた。

「あ、ごめん。宿はどこでもありそうなんだって。それでね、少しこの人と話をしてたんだけど、このあたりの遺跡に強力な魔獣が住み着いて、商品が入って来ないらしいの」

「それがどうした」

「ここはやっぱり、力のある私たちが何とかするべきじゃないかしら」

「ギルドには依頼出してるんだろ？なら必要ない」

「それが、どこもかしこも魔物や魔獣が活発に活動してて、ここまで手が回らないんですって」

シルビアはさっき青年から聞いた言葉を繰り返す。

「面倒は嫌いだ、俺は行かん。あの落ちこぼれでも、一人で放り込んどけば喜んで退治してくるだろ」

「またそうゆうこと言って。これ以上エースのM属性が悪化したらどうするのよ。ただの変態よ！？」

「知るか！俺のせいじゃない」

「もともとキールが調教に失敗したせいじゃない！」

「あのグズが弱いのが悪いんだ！」

シルビアとキールが青年の露店の前で喧嘩を始めてしまった。

トモネは止めに入ろうとするが、タイミングが分からずおろおろするばかり。サーニャに至っては、ニコニコとほほ笑みながら青年の持っていた魔結晶を見ている。

そこに痛みから復活したエースがやってきた。

「トモネ、あの二人何してるんだ？」

エースが後ろから声を掛け、何気なく肩に手を掛けた。

だが、エースを変態として扱っているトモネにとって、それはやってはいけない行為だった。

「キャー！変態ー！！！！」

振り向きざまのトモネのアッパーがエースの顎を捉える。無意識の反射に手加減などと言うものは、一切ない。

「うぐぅ……」

エースは華麗に中を待って地面にドサッと倒れ伏す。

その音に気づいたキールとシルビアが倒れたエースを見る。

「エース、これはしばらく動けそうに無いわね」

「勇者が拳闘士にやられるって……本当にウジ虫なみの弱さだな」

「私たちで行くしかないわね」

「チッ」

「少々お待ちください」

突然、今まで青年の持っていた魔結晶を眺めていたサーニャがストップをかけた。

「どうした？」

「少し気になることがございまして、遺跡へは私とキール様で行きたいと考えます」

「俺とお前でか？」

「はい」

サーニャは一つだけうなずく。その目は真っ直ぐにキールを捉えて離さない。

しばらく見つめ合ったまま動かない二人を見ながら、シルビアはあることを思い出していた。

そう、森の中での出来事だ。

「（まさか、暗い遺跡のなかでまたヤるんじゃ……）」

「そうではありませんよ？」

「考え読まれてる！？」

シルビアはボンッと顔を真っ赤にして俯く。

それを無視して、キールが言葉を発した。

「分かった。いいだろう、遺跡に行くのは俺とサーニャだ。それでいいかシルビア？」
「ええ、ちゃんと魔獣を退治してくれるならね」
「お任せください」

サーニャが優雅に一礼する。
そこでシルビアはあることを思い出した。サーニャが戦ってるところを実際に見たことが無い。実力を知らないのだ。
教会の時はキール一人が戦ってたし、盗賊の時は物影に隠れたままだった。

「そう言えばサーニャさんって強いの？一応魔獣の住んでる遺跡に行くんだけど大丈夫？」
「安心しろ。サーニャはお前らより遥かに強い」
「うそ！？」
「本当だ、カスが。お前らの強さを十としたらサーニャは今で六十と言ったところか。全盛期なら八十は行っただろうがな」
「サーニャさんって何者よ！？」
「聞くと引き返せなくなるぞ」
「あぁぁ！もう！いいわよ聞かないわよ！」

シルビアの中でサーニャの存在がどんどん分からなくなってゆく。
最初はただのメイドだと思っていたら、拷問のプロだったり、かと思ったら自分やエースより遥かに強いと言われる。キールの言っていることなのだから、おそらく本当なのだろうが、だとしたらなおさら、納得しがたいものがある。

「今日潜ってもあまり時間が無い。行くのは翌朝にするぞ」
「はい、問題ありません。その間に情報を仕入れておきます」

「頼んだ」
「あ、あんたらが何とかしてくれるのかい？」
さっきまでキールたちの会話においてきぼりだった青年が、口を挟んできた。
「そうだ。文句があるのか」
「いや、こちらとしちゃ願ったりかなったりだ。ぜひ頼みます」
「なら口を挟むな鬱陶しい」
「す……すみません……」
キールの辛辣な言葉に青年は縮こまってしまう。
「ごめんね。この人かなり口悪いから。あんまり気にしないで」
シルビアが縮こまってしまった青年にフォローを入れて、キールたちはその場を後にした。
もちろん気絶した勇者はシルビアが引きずって行った。

メイドは魔物と再会し、僧侶は楽しむ。２（前書き）

戦闘を書くのって難しい……

メイドは魔物と再会し、僧侶は楽しむ。2

翌朝。キールとサーニャは予定通り二人で遺跡に来ていた。
話していた遺跡は、村から五分ほどの所にあった。確かにこの近さなら、村にいる冒険者たちが、小遣い稼ぎに潜るのも分かる。
サーニャが集めた情報によれば、ここに出てくる魔獣はどれも弱いものばかりで、初心者の冒険者にもお勧めできる遺跡だそうだ。
そこに強力な魔獣が住み着いてしまい、青年のみならず、村の色々な人が困っているとのことだった。

「それで、この遺跡に何がある」
「あの青年の持っていた魔結晶ですが、どうやら普通の物とは違います」
「どう違った」
「あれは天然に出来たものではありませんでした。強力な魔力を人工的に凝縮して作られた物です」
「魔結晶の人工生成はまだ不可能だと聞いたが？」
「人間には不可能です。凝縮するための魔力が足りませんから。ですが魔物なら可能です」
「つまり、この遺跡の中にいるのは魔物だと？」
「間違いありません。しかもかなり高位の魔物でしょう」

魔物の中でも高位に位置する物は自分の意思をはっきりと持って行動しているものもいる。そうでなければ魔王と言う概念は存在しないし、魔結晶の人工生成もあり得ない。

「で、どうするんだ。俺が捻り潰すか？」
「いえ、私が対処します。マスターは遺跡の最深部へ行っていただき、そこにいるであろう魔獣の退治をお願いします」

「魔獣も実際にいるのか？」
「おそらくその魔物が、魔結晶を利用して生み出した、かなり強力な個体がいると思われます」
「そうか、面白そうだ」
「では後ほど」

そう言うと、サーニャはキールの隣から姿を消した。
それに対してキールは驚くことは無い。それはサーニャができて当たり前のことだからだ。
誰もいなくなった遺跡の前から、キールはゆっくりと歩みを進めた。

サーニャにあらかじめ貰った地図を頼りに、最深部へと一直線に進んで行く。
色々な冒険者によって発掘されているため、道は思いのほか広く、綺麗で歩きやす。
どんどんと奥へ進んで行くと、地図に書いてある通りの大きな空間に出た。
その先に扉が見える。そこに地下に進む階段がある。

「さて、一体目……と言うことでいいんだろうな」

広間には巨大な鹿がいた。おそらく話しにあった魔獣だろう。
三メートルはありそうな巨体に、大きく鋭い角。目は双方とも暗闇の中で赤く輝いている。
魔獣はグルルルルとキールを威嚇している。臨戦態勢と言った状態だ。

「なるほど確かに強そうな魔獣だ。だが……」

キールが言葉を言いきる前に魔獣は動きだした。
物凄い勢いでキールに向かって突進してくる。その速さの突進で角に当たれば、致命傷は間違いないだろう。

「威勢がいいな。壁（へき）！」

ガン！！！っと魔獣が突然何も無い空間で何かにぶつかった。
しかし、尚も前に突き進もうとぶつかった何かに体当たりを続ける。

「俺の壁は、簡単には破れんぞ」

キールが使ったのは魔法だ。それも詠唱を行わない短縮魔法。
短縮魔法は威力が下がる代わりに発動までの時間が掛からず、先手を取りたい時によくつかわれる方法だ。
そして唱えた壁は自分の魔力を消費して、それに見合っただけの透明な壁を作り出す魔法だ。短縮魔法で作られたことによって、普通に詠唱するよりもはるかに脆くなっているが、それでも魔獣の攻撃にびくともしない。

「次は俺の番だ。
蹂躙する刃は世界を噬え。千本の刃（サウザンド・ナイフ）」

キールが唱えると、魔獣の周りに大量の魔力が集まる。それは少しずつ固まり、鋭利な刃を形成する。
形成を終えた刃が、一斉に魔獣に向かって放たれた。
広間の中で隠れる場所も無く、無防備な体をさらす魔獣はその刃にいとも簡単に串刺しにされていく。
血しぶきが飛び散り、魔獣の悲鳴が遺跡内にこだました。

魔獣の悲鳴をサーニャは遺跡の中腹で聞いていた。

「マスターも人が悪い。一撃で仕留めてあげればいいものを」

サーニャが目指しているのは、この遺跡のどこかに隠れている魔物の場所だ。

サーニャの目には、はっきりとその存在が映っている。

壁越しであろうと、どれだけ強力な結界を張ろうと、サーニャの目をごまかすことはできない。サーニャには魔力が直接見えるのだ。

それも、壁や地面を透して。

「なるほど、この壁のおくですか。結界を張って、壁自体に注意が向かないようになっているのですね。いい方法ではありますが、ベストではないですね」

サーニャが壁に触れる。するとパリンとガラスの割れるような音が響いた。

いや、実際にはそんな音はしなかった。魔力が見え、より身近な存在だからこそ、サーニャにはそう聞こえるだけだ。

「これで結界は破れました。後はこの奥の魔物だけですね」

壁をグッと押し込むと、いとも簡単に壁がずれた。

そして一部が開き、その奥に通路が姿を見せる。

サーニャは躊躇わずその中へ入って行った。

地下三階。それがこの遺跡の最深階層だ。初心者の練習にもいい遺跡なのだからそれぐらいが当然だろう。
キールはその地下三階に到達した。
地下二階の広間にも魔獣はいたが、一階の魔獣と同じようにザクザクと貫いて終わらせた。

「さて、最後ぐらいは楽しませてくれるんだろうな」

魔獣がいる広間以外は特に何も無く、すいすいと進んできてしまったため、遺跡に入ってからまだ一時間も立っていない。

広間に入ると、キールは口元に笑みを浮かべた。

「ケルベロスか。なかなかいいものを用意してくれる」

ケルベロス。それは魔獣の中では高位の存在である。
発見例が非常に少なく、発見された場合は、国を持って討伐するほどの危険な代物だ。
三つ首はそれぞれ別の感情を持っており、独立している。
しかし今は、その全ての首がキールを睨みつけ、敵と認識していた。
当然だろう。ここまで来る間に倒した魔獣は二体とも、壮絶な悲鳴を上げて死んでいったのだ。
それがここまで聞こえてこない訳が無い。

グルァアアアアアア！！！！！！！！

三つの首が一斉に吠えた。咆哮が衝撃波となってキールを襲う。
キールはそれを壁を使うことで難なく防いだ。

「いいぞ。いい威勢だ。俺を楽しませてみろ！」

キールとケルベロスの戦いが始まった。

先手を取ったのはケルベロスの方だ。その巨体に見合わない、俊敏な動きでキールに迫る。

キールはそれを、壁を張って再び受け止める。

ガンッ！と重い音がして、ケルベロスが壁にぶつかる。今度も一体目の魔獣と同じように、ケルベロスの突進は止まった。

しかし、ケルベロスはやはり普通の魔獣とは力が違った。

ぶつかった壁に罅（ひび）が入る。そして、大きく振りかぶった前足で、ケルベロスはその罅の入った壁を殴りつけた。

すると、今までの魔獣の体当たりにびくともしなかった壁が、ガラスが割れるように砕け散る。

「ほう。短縮魔法とは言え、俺の壁を破るか。やはりケルベロスの名はだてじゃないと言ったところか」

キールは自分の魔法が破られたことに対して、その笑みを増す。

「俺の壁がこうも簡単に破られたのは何時以来だ？そうだな、たしか最後はあいつと戦った時だったから一年ぶりって所か」

キールが一人呟いている間に、ケルベロスはキールと距離を取った。その内の一つ、右側の頭が、他のとは違う動きをし始めた。魔法を使う気だろう。

高位のものであれば、魔獣も魔法を使う。自らの体内に蓄積された、暴走する魔力を使って、魔法を発動させるのだ。

もちろん魔獣は詠唱などと、高度なことができるはずも無く、原理としては短縮魔法をより強引に発動した形になる。

そのため魔力消費も半端ないが、暴走する魔力はそれを可能にする。

グラァァァァ！！！！！！

右側の頭が吠え、口から炎を吐きだした。

「水壁！」

キールは炎が届く寸前に、自分の前に先ほどの透明な壁とは違い、今度は水の壁を出現させる。

炎と水が激しくぶつかり合い、ドンッ！と爆発を起こした。

キールはその衝撃を壁で防ぐ。

ケルベロスはまともに衝撃を受けたが、それが聞いているようには見えない。

「良いぞ。俺に敵対心を燃やせ。俺に殺意をぶつけろ！」

グラァァァァ！！！！！！！！

今度は先ほどと反対側の頭が吠えた。そして口にバチバチと帯電する玉を生み出す。

「ほう、頭によって属性を変える、そんな能力もあるのか。興味深い」

さらにそれは電気を固めた玉だ。水壁などいとも簡単に撃ち抜いてくるだろう。

キールは水壁を解除して、次の魔法を発動する。

「土壁！」

今度は土の壁がキールとケルベロスの間に立ちはだかる。
雷球はそれに直撃して、壁の一部を吹き飛ばす。しかし、貫通するまでには行かなかった。

「針山！」

キールが続けざまに魔法を唱える。
土壁の中から、突如として大量の金属でできた針が出現し、一斉にケルベロスに襲い掛かる。
すると今度は真ん中の首が吠えた。
キールは炎、雷と来たのだから真ん中の属性は水と考えていた。だからこそ、三種類のどの属性でも防ぎきることのできない針山を使った。
しかし、真ん中の首の属性は、キールの予想とは違う物だった。
突如として、広間の中に嵐が吹き荒れる。
そして、ケルベロスに向かって放たれた針山の軌道をそらした。

「ほう、風の属性を持っていたのか。てっきり水だと思っていたが、実に面白い！」

ケルベロスはもちろんキールの呟きを黙って聞いているなんてことはせず、間髪いれずに魔法を放ってくる。
今度は三つの首が同時に吠え、魔法を発動した。

「三つ同時に吠えると五月蠅いな。首を減らさせてもらうぞ！
風流れて世界を嗤え。切断の風（ウイング・アピュティション）」

先ほどケルベロスが作った風の流れを利用して、キールはカマイタ

チを生み出す。
それは見えることなく、ケルベロスの首の一つを切り落とした。
ギャァァアアアア！！！！！
他の首が、その痛みに悲鳴を上げる。
「どうした！まだ魔法は続いているぞ！」
二本めのカマイタチが再びケルベロスに襲いかかった。

メイドは魔物と再会し、僧侶は楽しむ。3

通路には罠の類が何も仕掛けられていなかった。

「注意が甘いですね。自分の能力を過信しすぎています」

サーニャは通路を悠然と進んで行く。そして突き当りの扉を開けた。
中は石造りの部屋だ。一見して研究室のように見える。
大量の試験管と、ビーカー。火に掛けられた釜はグツグツと煮え立っている。
そしてその中に、白衣を着た肌の青白い男がいた。
明らかに人間の肌の色ではない。
もしそんな肌の色の人間がいるのだとしたら、それはすでに事切れた死体だろう。
男はサーニャの存在に気づいていない。
水晶の中を覗きこみながら、真っ青な顔をしている。
おそらく、その水晶に魔獣とキールの戦闘の様子が映っているのだろう。
サーニャも、その水晶を何度か使ったことがあるので知っていた。
そして今回の主犯を確信する。

「久しぶりですね。科学者、ヒストライス・セルン」

その声に驚いたように男が振り返る。

「な！……あなた様は」
「私は、今はマスターの契約者です。その名前で呼ぶべきではありません」

サーニャは自分の名前が呼ばれそうになるのを、上から言葉を被せることで防いだ。

「そんな！貴方様が何故、契約悪魔などになり下がっているのですか！貴方様の力があれば、世界を征服することなど造作も無いはず！」

「私の契約者は私を倒した男です。今あなたの水晶に映っているでしょう」

「なっ……この男が！？」

セルンは再び食い入るように水晶を見つめる。

そこではケルベロスとキールの決着がつこうとしていた。

ケルベロスの頭はすでに二つ切り落とされ、残りは真ん中の一つとなっている。

キールには怪我一つ付いていない。

「なかなか楽しめたぞ。魔法をこれほど使ったのは久しぶりだ。だがそろそろお終いだな。その傷では、もう先ほどのようには戦えないだろう」

グルルルル……

獣の声には、もうあまり力がない。他の切り落とされた首から流れ出る血で、すでに体内の血が足りなくなってきている。

この状態なら、ほっといても時期に死ぬだろう。

だが、キールは魔法を発動させた。

「一瞬で終わらせてやる。楽しませてくれた礼だ。世界に反して世界を嗤え。重力開放（グラビティ・バニッシュ）」

すでに弱って、動くことも、魔法を発動することもままならないケルベロスに、キールの魔法が襲いかかった。

重力開放は、重力を操り対象にしたモノに強烈なGを掛ける魔法だ。あまりにも威力が高すぎて、物体を極限まで押し縮めてしまう。そのため、つかった後に肉眼で確認できるのは、そのモノが流した血の跡だけだ。

ケルベロスもそれにはあたがわず、一瞬の内に圧縮され見えなくなった。そしてまき散らした血の跡だけが遺跡の広間に残される。

「これで終わりか」

キールは首をコキッと鳴らすと、元来た道を戻って行った。

自信作であったケルベロスを難なく殺され、セルンは呆然としていた。

「これがマスターの力です。あなたはこれ以上、ここにいるのをやめなさい。そうすれば危害は加えません」

サーニャが男をやさしく諭す。しかし男はそれに逆らった。

「そう言うわけにはいきません。私はもっと魔法科学を発展させなければならない。そのためならサタン様だって的に回します！」

「そうですか――――」

サーニャは小さくため息をつく。出来ればセルンを殺したくは無かった。
だが、マスターの道の障害になる可能性があるのなら、それは取り除かねばならない。

「――――では死んでください」

サーニャが手を一振りすると、男の首が飛んだ。
ゴトッと重い音がして、首が地面に落ちる。その表情は焦りに満ちていた。

「これで私の仕事はお終いですね。それにしてもなぜ魔王城にいたはずのセルンがこんな場所に？……」

セルンはもともと魔王城で、魔王のお抱えとして魔法科学の研究にいそしんでいた。
サーニャが水晶の遠視を使ったのも、魔結晶を人工的に作り出せることを知ったのもそこでだ。
それが今ではなぜかこんな辺境の遺跡に隠れて魔獣を作っている。
セルンは変な存在として扱われてはいたが、それでも魔物に貢献はしていたはずだ。普通なら魔王城を追い出されるはずはない。
それがサーニャには気になった。

「魔王城で、何か起きていると言うことでしょうね。私にはマスターがいるから関係ありませんが」

昔の家を思い出しながら、サーニャは隠し部屋を後にした。

サーニャが遺跡の外に出ると、すでにキールが近くの切り株に腰をおろして待っていた。

「お待たせいたしました」
「いい。それで何か分かったか？」
「今回の主犯が判明しました。やはり魔物でした」
「そうか、それで」
「止めて出て行くように行ったのですが、抵抗したため殺しました」
「容赦ないな」
「元魔王ですから」

サーニャはにっこりとほほ笑む。

「あと気になることが一つ」
「なんだ、言ってみろ」
「今回の主犯になった魔物ですが、魔王城で抱えていた科学者でした。どうも魔王城から追い出されたらしいのですが、その理由がよく分かりません」
「魔王城で何かが起きていると？」
「はい。そう思われます」
「なら直接行って調べるだけだ。どうせあいつらも行くしな」
「はい。マスター」

「あら。もう帰ってきたの？早かったわね」

宿に帰ると、シルビアが出迎えた。
エースは未だ意識を取り戻さないらしく、ベッドに寝かされたまま

だ。
トモネは、露店をぶらぶらと回っているようだ。

「ああ。魔獣は全て倒した」
「やっぱり魔獣だったんだ」
「どれも雑魚ばかりだったがな。はた迷惑な話だ。あんなものも対処できないのか屑どもは」
「まあまあ。それで、もう遺跡は安全って言い方もおかしいけど、今まで通りに戻ったの？」
「ああ、それは間違いないだろう」
「了解。じゃあ、あの露店の人に話してくるわ」

シルビアはそう言い残し、部屋を出て行った。
これでこの村にとどまる理由は無くなった。明日にでも出発することになるだろう。

「サーニャ。明日には出発する。準備をしておけ」
「はい分かりましたキール様」

メイドは魔物と再会し、僧侶は楽しむ。３（後書き）

僧侶が最強なら、メイドも最強です（笑）

最近勇者が空気なので、トモネともども活躍させたいですね。

更新まで、またしばらく間が空くと思いますが、よろしくお願いします。

剣士は拳闘士と共闘し、勇者は乱舞する。１（前書き）

やっとエースたちを活躍させれそうです！

剣士は拳闘士と共闘し、勇者は乱舞する。1

「なあ、次の村まであとどれぐらいなんだ？」
「もう少しね。今日の夕方には着くと思うわ」
エースの問いにシルビアが答える。
「やっとか」
「これでもかなり早い方よ。私達だから大丈夫だったけど、普通の騎士とかなら、もっと時間が掛かってるわ」
「そう言えば、かなりのペースで来たのにトモネも全く遅れなかったな」
「これでも鍛えてますから」
旅の五日で、トモネは何とかエースと会話できるまでには耐性ができてきた。
しかし、いまだに触れられると反射的にエースをノックダウンしてしまう癖は直っていない。そのためトモネとエースの間には必ずシルビアかサーニャが入っていた。
「後はやっぱりキールさんの結界のおかげですね。あの中だと安心して眠れますから、体力の回復がしやすいです。一人旅の時は、寝ても数十分とか仮眠程度でしたから」
「それは私も思うわ。毎晩感謝しっぱなしよ」
「俺としては、もう少しスリルが欲しいけどな！」
勇者のM発言を軽く流しつつ、進む。
その間キールはサーニャと共に最後尾で黙々と歩いていた。

さらに三十分歩いたころ、トモネが立ち止まった。
それに気づいたシルビアが声を掛ける。

「どうしたの？」
「鳥が、やけに鳴いてますね」
「そう？いつもと変わらない気がするけど」
「獣人の方々は、動物の気持ちに敏感なんですよ」
「そうなの？」

サーニャの答えに、シルビアが驚いてトモネを見る。

「そうですね。動物の血が多く流れてるだけに、私たちは動物と関わりを持つことも多いですから」
「へー、始めて知ったわ」
「獣人自体が、あまり人間と関わりになろうとしませんからね」

トモネ自体も盗賊に捕まって、売られそうになっていたのだから当然と言えば当然だろう。

「なあ、鳥がやけに鳴いてるってことは、何かあるのか？」

エースがそれた話を軌道修正した。

「そうですね。ここまで騒がしいのは、何か危険がある時だけです」
「調べた方が良いと思う？」
「私としては、先に村まで行ってしまった方が良いと思います。もしかしたら人間が狩りをしているだけかもしれませんから」
「そうですね。荷物も沢山ありますから、私も先に村に行くことには賛成です」

トモネの意見に、サーニャも賛成する。
五日経っているとはいえ、結構な量の荷物がまだ残っている。この状況で何かを調べようとしても、邪魔になってしまうだけだ。

「わかったわ。なら私たちはこのまま村を目指しましょ。調べるのは村に着いてからよ。
分かったわね、エース」

今にも飛び出しそうなエースに、シルビアは釘をさす。
苦行、難しい、厳しい、そんな言葉に敏感に反応するエースの思考を、大分分かるようになってきているシルビアであった。

少し急ぎ足に一行は村に向かった。そのおかげで夕方より少し前、日が傾き始めるころには村の見える丘までやってくることができた。
そこでトモネが村の異変に気づく。

「村から煙が上がってます！」

第二中継地点として使われている村は、前の村よりか規模は小さいが、それでもそこらへんの村よりかは大きい。
その村から大小さまざまな大きさの黒煙が立ち上っていた。

「鳥が騒いでたのは、これが理由みたいです！」
「急ぎましょ！」

シルビアの声で、一行は丘を掛け降り村を目指した。

村に近づくと、周りには避難した人たちが集まっていた。
シルビアはその中の一人の声を掛ける。

「なにがあったんですか？」
「魔物に襲われたんだよ」
「魔物！？」
「ああ、ゴブリンの群れだ」

ゴブリンは魔物の中では最も下級の存在だ。上位の存在はその自我をはっきりと持ち、考えることをするが、下位の魔物は、魔獣と同じようにほぼ本能で動く。
ゴブリンはその下位の中でも最低とされ、本能に従って動く厄介な存在だ。
腹が減れば人を襲うし、邪魔だと思えば何でも破壊する。
魔獣と変わらない行動をするくせに、魔物のように強い。
見つかれば真っ先にギルドから討伐依頼が出されてもおかしくない存在だ。
だが、ゴブリン自体は倒せない相手ではないはずだ。特に第二とは言え、旅の中継地点だ。冒険者がいないはずが無い。

「冒険者の方たちで、討伐は出来なかったんですか？」

シルビアは、そのことを尋ねる。

「もちろんいたさ。それも大勢ね。
でもダメなんだ。ゴブリンの奴ら、いつもは多くても十匹単位で攻めてくるのに、今日は何百匹もいて、冒険者だけじゃ対処が間に合わなかったんだよ。
町もあの通り燃えちゃって、死者もかなり出てる……」

男はつらそうに顔を伏せた。

「今はどうなってるんです？逃げ遅れた人とかは？」
「まだいると思う。でもゴブリンどもが町にとどまってるせいで救助にも行けない」
「なら私たちが行きます！」
「君たち冒険者なのかい！？」

シルビアの発言に、男が驚いて声を上げた。その声に反応するように、周辺にいた人たちもシルビア達を見る。誰もが藁にもすがる気持ちだ。

「俺は勇者のエースだ。魔王を討伐するために、仲間を集めながら各地を回ってるんだ」
「勇者ってあんたがか？」
「そうだ。俺達が救助に行く。いいよなシルビア」

エースがシルビアに確認を取る。その目はすでに行く気満々だ。勇者としての使命と、危険が目の前にあると言う興奮から、ウズウズしているのがシルビアにはよくわかった。
だが、助けに行くのはシルビアも同意見だ。ほっておくことなど出来ない。

「もちろんよ。行くのは私とエースね。三人はここで負傷者の手当てをお願いできる？」
「いや、トモネも連れて行け」
「え、私ですか！？」

今まで沈黙を続けていたキールが突然言った。

「どうして？」
「こいつの実力を見るのにいい機会だ。負傷者は、俺とサーニャの

魔法でなんとでもなる。ゴブリンならちょうどいい腕試しになるだろ」
「分かったわ。なら二人でお願い。トモネ、エース、行くわよ！」
「おう！」
「はい！」

邪魔な荷物を置いたエース達は、手早く戦闘の準備を整えると、燃えさかる町に向かって走って行った。
それを見送ってキールは、周りの人間全員に聞こえるように声を張る。

「負傷者を集めろ！今から一気に治療するぞ！重症者は先にしろ。軽傷な奴らは唾でも付けておけ！連れてきたら骨折って叩き返すからな！」

決して怪我人に掛ける様な言葉ではないが、今の状態がそれを許した。
重傷者が後回しになれば、その分死亡する可能性は上がる。
パニック状態になっているこの場所で、キールの声は一般市民を落ち着かせるのに効果てきめんだった。

「サーニャ、けが人の選定はお前に任せる。重症のやつから連れてこい」
「承知しました、キール様」

その場に布だけ引いて、簡易的な治療施設を作ると、キールは治療を開始した。

「キールって治療魔法も使えたんだな……」

後方にキールの声を聞いていたエースの感想だ。
流石に戦闘の直前と言うこともあってトリップはしていない。このあたり、キールの調教の上手さが出ている。

「そうね。キールさんって僧侶だったのよね。いつも、戦闘でも最前線で戦ってたからすっかりその事忘れてたわ」
「キールさんって僧侶だったんですか！？」

エースとシルビアの会話にトモネが驚く。
トモネに言ってなかったことを思い出して、シルビアが説明した。

「キールさんは僧侶よ。私たちがあった時は小さな教会に住んでいたの」
「そうだったんですか。あんなに強いからてっきり王宮の魔術士か何かと思ってました」
「王宮の魔術師でもあんなに強いのは見たこと無いわね」

騎士として王宮で訓練していたシルビアがしみじみと言葉を漏らす。
エースもそれには納得していた。
そうしているうちに町の前まで到着する。
エースは剣を抜き、盾を構える。シルビアも背中の大剣を構えた。
トモネは拳闘士のため、手袋をしてはいるが、特に装備は無い。

「じゃあ突っ込むぞ！」
「私はトモネと左に行くわ。エースは右を回ってゴブリンを掃討して。
中央で合流しましょ」
「了解」
「分かりました」

シルビアはトモネをサポートできるように自分と行動させる。
エースの力なら、ゴブリン程度は百匹いようと二百匹いようと大丈夫だと分かっている。
簡単な作戦だけ考えて、三人は町に突入した。

剣士は拳闘士と共闘し、勇者は乱舞する。２（前書き）

今回のは四部構成になりそうな予感……

剣士は拳闘士と共闘し、勇者は乱舞する。2

「走れ、光の刃！ライトニング・アロー、バランスシフト！」

エースが呪文を唱えると、エースの周りに魔力が集まり、光の矢を形成していく。

全部で二十発に及ぶ魔力の矢が完成すると、それは一斉に道にいるゴブリン達を襲う。

ライトニング・アローは光魔法の中では初歩的な魔法だ。

威力は小さいが、その分色々な改良をすることができる。

今エースが唱えたのはその中でも一般的なものだ。

ギャアアァァアァァ！！！

矢に貫かれたゴブリン達が、奇声を上げて死んでゆく。その声を聞いた他のゴブリンがぞろぞろと民家から出てきた。

「確かに多いな。こりゃ苦労しそうだ。

走れ、光の刃！ライトニング・アロー、バランスシフト！」

口では苦労しそうだと言っておきながら、エースの表情には余裕が見える。

エースは生き残りの捜索よりも先に、ゴブリンの掃討を開始した。

生き残りがいたとしても、ゴブリンが道にうじゃうじゃいる今の状態では、安全に助け出すことはできない。

まずは道にいるゴブリンを掃除、その後まだ形のある民家を一軒一軒回りながら、中にいるゴブリンを片づけつつ生存者を捜すことにした。

「ハ！」

バシュッとゴブリンが真っ二つに裂かれる。
一軒の民家に入ったとたん、家具の陰から襲いかかってきたゴブリンを切り裂いた。

「誰かいるか！？」

返事は無い。一軒ずつ回るのだから、中を細かく確認していく時間は無い。
声だけ掛けて、次の家へ。

六軒目に入った民家で、始めて生き残りを見つけた。
幼い男の子とその母だ。
物置の中に隠れていたのを、エースが声を掛けたことで出てきたのだ。

「よく耐えたな、偉いぞ」

エースは今にも泣き出しそうな男の子の頭をやさしく撫でる。
男の子は嬉しそうにうなずいた。

「ありがとうございます。おかげで助かりました」
「いえ、当たり前のことをしただけですから。他に、この近くに生き残ってる人が避難してそうな場所ってありますか？」
「集会所があります。そこなら避難している人がいるかもしれません」
「わかりました。すみませんが僕についてきてください。今、あなた達だけを送り届けてる余裕はありません。僕のそばにいれば安全

ですから」
「はい、わかりました」
「うん！」

その後も、エースはゴブリンを片っ端から殺してゆく。
すでにその数は百匹を優に超えていた。
そして男の子の母親に案内されて、集会所まで来た。

「ここか」
「はい」

集会場はゴブリンに取り囲まれていた。
おそらく中で生き残った人々が抵抗しているのだろう。
集会場を取り囲んだゴブリンの数はざっと見ても五十匹以上はいる。
流石にこの数になると、先ほどのバランスシフトでは片づけきれない。
だが、エースの作ったライトニング・アローのバリエーションは他にもある。

「走れ、光の刃！ライトニング・アロー、サウザンドシフト！」

巨大な光の魔法陣が集会場の上に突如として現れた。そしてその中から先ほどエースが放っていた魔法の矢が降り注ぐ。
サウザンドシフトはエースの大量の魔力を惜しげも無く使うことで、広範囲を一気に殲滅するための魔法だ。これを使った後しばらくは大きな魔法が使えなくなるが、今はゴブリンの掃討を優先した。
降り注いだ矢は建物をすりぬけ、ゴブリン達だけを射抜いてゆく。
光魔法が効くのはある程度以上の魔力を宿したものだけだからだ。
人間の魔力は魔法使いであっても、魔物に比べれば微々たるものののため、集会場の中にいる生き残りを気にする必要はない。

しばらく魔法の矢が振り続き、集会場の周りにいたゴブリン達を掃討した。

「よし、行きます。着いてきてください」

エースは守っている二人に声を掛けて集会場に近づいて行った。

「ほんとに多いわね！」

「そうですね！でも、これぐらいなら問題なく戦えます！」

シルビアとトモネは、突入してすぐにゴブリンと戦闘を開始した。エースの様に大量の敵を被害無く一気に相当する技を持っていない二人は、一体一体斬り、殴り、蹴り飛ばして殺して行くしかなかった。

その分エースよりかなり進行が遅い。

しかし、トモネがシルビアの想像以上に強く、サポートをする必要が無かったため、かなりのハイペースでゴブリン達を殺して行った。

「このままじゃ埒が明かないわ。なにか一気に片付ける方法ってないかしら？」

しゃべりながらも、剣を振り近寄ってきたゴブリンを、まとめて三匹斬る。

「私の技なら一息に片づけられるかも知れないんですが、周りの被害も、かなり酷くなってしまうんです」

「被害ってどれくらい？」

「この周りの民家が全て倒壊します」
「それは厳しいわね。このあたりまだ火の手も来てないから、なるべく残しておいた方が良いでしょうし」
シルビア達がいる場所は、幸いなことに火の手が上がっておらず、民家が比較的無事な場所だった。
そのため、ゴブリンの掃討を終えた後、戻ってくる人たちのためにもなるべく無事な家は残しておきたかった。
「なら、このあたりのゴブリンは頑張って掃討しましょ。そしたら火の手の上がってる所へ行って、トモネの技を見せてもらうわ。燃えてる家ならむしろ崩しちゃった方が良いから」
「分かりました」
トモネがゴブリンを蹴り飛ばし、頭を吹き飛ばした。
「ねえ……さっきからかなりグロくない？」
「そうですか？」
シルビアはなるべく血がつかないよう、剣先で斬るようにしていた。
そのおかげで服にはほとんど血が付いていない。
比べてトモネはすでに真っ赤である。
先ほどからトモネは、ゴブリンの群れの中心に飛び込んで、その拳でゴブリン達を掃討している。
拳を振り抜けば頭が割れ、脳症が飛び散る。蹴り抜けば腹を貫通して内臓を飛び散らせていた。
そのためトモネの両手両足には、謎の物体が大量に付着し、血を滴らせている。
そんな中、何食わぬ顔でシルビアと会話しているのだ。

「あ～……まあ良いわ。とにかく片づけるわよ！」
「はい！」

時間はかかったが、特に苦戦することも無く、シルビアとトモネはゴブリンを二十分以上かけて掃討することに成功した。
すでにトモネは全身真っ赤で、シルビアも血が掛からないように気おつけてはいたが、それでもかなりの量の血を浴びてしまっていた。
髪の毛から乾燥した血が所々バリバリと崩れ落ちる。

「うぅ……気持ち悪い」

髪の毛に付着した血を取りながらシルビアが呟く。

「拳闘士の場合、気にしてられませんからね」
「それ女の子としてどうなのよ……」
「生きることが優先ですよ」
「うぅ……」

トモネに正論を諭され、ぐうの音も出ないシルビアだった。

予定通り、掃討を終えたシルビアとトモネはかなり火の手の強い場所にやってきた。

「このあたりは熱いですね」
「これだけ燃えてると仕方ないでしょうね」
「私熱いのって苦手なんですよね……」

トモネの耳としっぽがシュンと垂れる。

「どうして？」
「私の村があった場所ってかなりの寒冷地だったんですよ。だから自然と寒さに強くなったせいで、熱さに弱くなっちゃったんです」
「それは仕方ないわね」
「とりあえずこの周りの家全部壊しちゃっても大丈夫でしょうか？」
「出来る？」
「はい！」

この会話の間にも、襲ってきたゴブリンを十匹ほど返り討ちにしている。
二人ともゴブリン程度では、相手になっていなかった。

「行きます！――――古武術技！地脈破砕！」

トモネは自らの拳を、全力で地面に叩き込んだ。
その瞬間大地が揺れ、叩き込まれた場所から、毛細血管が広がるように罅割れてゆく。
そして次の瞬間、罅割れた地面が一斉に砕け散った。

エースは集会場の中にいた。
ゴブリン達を掃討した後、静かになった外を怪しんだ生き残り達がこっそりと外を確認した時点でエース達を発見。中に入れてもらった訳だが、そこで思わぬ事態に遭遇していた。

「流石に多すぎる。全員連れて行くなんて無理だな……」

集会場の中には二十人以上の生き残りがいた。それもみな怪我をし

ていたり、女子供だ。
全員を守りながらゴブリンを掃討するなんて不可能だ。
「俺達のことは良い。あんたはゴブリンを頼む」
「まだどこかに生き残りがいるかもしれないんだ。そいつらを助けてくれ」
「でも……」
集会場の回りを掃討したとは言え、大量にいるゴブリンがまたいつ集まってくるとも分からない。
このまま放っておく訳にはいかなかった。
――その時、激しく地面が揺れた。
「なんだ！？」
「地震か？」
「崩れる！？」
「大丈夫じゃ。ここはそんなに柔な造りはしとらん！」
突然の揺れに慌てる若い人たちを、年の功だろうか、落ち着いた様子の老人たちがいさめた。
「外を調べてくる」
エースは、そう言って外に出る。
そこで驚くべき光景を目にした。
今まで激しく燃え上がっていた火の手が収まりつつある。
燃えるべき家々が破壊され、崩れ落ちていたからだ。
「何が……起きたんだ……」

先ほどの地震が原因で崩れたのは間違いないだろうが、それがタイミングよく起こるとは思えない。
そして、さらに驚くべきことに、ゴブリンの姿が一気に減っていた。
少し遠くを見れば、まだまだ沢山いる様な状態だったゴブリン達が、地面の割れ目に挟まり絶命している。

「とにかく、これならここを離れても大丈夫そうだ」

少しの量なら今いる冒険者たちだけでも十分対処できる。
エースは集会場の人達にその事を告げ、当初の予定通り、生き残りを探しながら再び村の中心を目指して進みだした。

剣士は拳闘士と共闘し、勇者は乱舞する。2（後書き）

この章がひと段落したところで少し改正を行いたいと考えております。
プロット書かずに思い付きだけで書いてきた弊害がここにきて発生しまして……

魔獣、魔物、悪魔の関連性ですが、
悪魔は魔物のなかで上位の存在をそう呼ぶのであって、魔物事態に変わりはありません。
また魔獣は素体が動物であり、魔力の暴走した姿です。

この関係性が書いている内に矛盾してきていた気がするので、修正をします。
ストーリー自体に変更があることは無いので問題ありません。

ご迷惑をおかけいたします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0694y/

僧侶は勇者を恫喝し、魔王を従える

2011年12月13日07時46分発行